
蒼眼の契約

宵音律葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼眼の契約

【Nコード】

N4425Y

【作者名】

宵音律葉

【あらすじ】

これは一人の式神師と、契約を結んだ式神・・・そして、主と呼ばれる者とその式神との関係を描いた和風ファンタジー小説です。

く冥鬼の影 闇夜の少女く 一刻（前書き）

萩たちはある依頼人から仕事を頼まれた。それはいつもながらの仕事だったのだが…

冥鬼の影 闇夜の少女 一刻

すべての始まり…この一言だった…。

「すまない…相模…。一族を断たせないためにもこうするしか
なかったんだ。」

「本当にすまない」

…まだ、日の光が見え始めた頃。

一人の少年の声が響き渡った。

「蒼全！ そっちにいったよ！！」

冥鬼を追う、紫苑色の少長髪に紫の瞳を持つ少年。
名を緋ノ原^{ヒノハラ} 萩^{ハギ}という。

緋ノ原家一族の式神師であり、現当主である。 年齢、十五。

「 ああ！」

また同じく、冥鬼を追う、藍色の長髪に蒼色の瞳を持つ青年。
名を蒼全ソウゼンという。

萩と契約を結んだ式神。外見では齡、十七。

…事の発端は昨日。

「 はい…。」

萩たちは仕事の依頼を受けていた。

依頼者は槍羅幸成さん。ソウラ ユキナリ外見は二十代後半。呉服屋の若旦那である。

話では槍羅さんの娘さんが毎晩寝ている時、屋敷の庭の方で不気味な声を聞くといい。

大抵このような奇妙な事には、冥鬼が関係している。

冥鬼メイキとはこの世で「悪しきもの」。幽霊、怨霊、物ノ怪といった類のものという。

冥鬼は式神師や冥魂を持つ人間以外には声は聞こえても姿、形は見えない。

「わかりました。では後程、そちらへ伺わせていただきます」
「ありがとうございます。では」

依頼者は一礼をし、部屋から出ていった。そのあとを女性が追いか
け、玄関へと案内した。

数分後、玄関へと案内しに行っていた女性が部屋へと戻ってきた。

薄桃色の長髪をポニーテールしており、紅梅色の瞳を持つ彼女。
名を東雲^{シノノメ}という。

彼女もまた、萩と契約を結んだ式神であり、外見では蒼全と同じ、
年齢 十七。

部屋へと入ってきた東雲に萩は「ありがとうございます。東雲」と一言いっ
た。

その言葉を聞き、東雲は彼に微笑んだ。

一緒に依頼の話聞いていた蒼全が口を開いた。

「萩、さっきの話しからして」

「…うん。その冥鬼はたぶん、冥魂を狙っているんだと思う」

冥魂^{メイコン}とは、ある特定の人間の中に存在する特別な力の塊である。

冥魂を持つ人間は普段は冥魂の放つ結界で守られており、冥鬼たち
は近づく事ができない。

冥鬼たちの中にも、人間に危害を加えないものと、冥魂を我がもの
にするために人間に危害を加えようとするものがある。

これをもとに代々生まれながら冥魂を持ち、冥鬼を近寄せ、被
い清める者を式神師^{シキガミニ}という。

… 依頼を受けてからどのくらいの間が過ぎただろうか。
仕事の準備はできたところで

「じゃあ、そろそろ行くか」
「… そうだな」

二人が玄関へ行くと東雲が待っていた。

「二人とも、仕事がんばってね！」

「うん」
「あゝ」

東雲の見送りの中、二人は依頼者の家へと向かった。
外では日が西の方へと沈もうとしていた・・・。

少し時間が経ち、萩たちは依頼者の屋敷へと着いた。

門の所では、依頼者の槍羅さんが待っていた。

「萩様、お待ちしておりました。…こちらです」

萩たちは庭へと案内された。するとすぐに二人は何かを感じた。

「…まだ、冥鬼の気配が残っているみたいだね」

「ああ。それも少しつてもんじゃないな」

「だね。…じゃあまず、結界を張ろう。中へ入らせないようにしないと」

萩はブツブツと何かを唱え始めた。

すると、辺り一面、何かスウ　つと不思議な感じのする空気に包まれた。

依頼者の槍羅さんもそれには気付いた。

「…これは！」

「結界です。結界内では冥鬼の気配も清められるので空気が澄んでくるんです。」

槍羅さんにはこの結界がお見えで？」

「いえ。見えるのではないのですが、何かスウ　と肌に触れる感じがしまして…」

その時。

「 わあ…！」

後ろで声がし、萩たちは振り返った。その先には障子から小さな女の子が顔を出していた。彼女も同様、結界に驚いていた。

槍羅さんは少々、慌てた様子で女の子の傍に行き

「 すみません。申し遅れました。娘の楓カエデです」

「 は、初めまして…。槍羅ソウラ 楓カエデです」

楓は少し恥ずかしそうにしていた。

萩は楓の傍に行き

「 初めまして。式神師の緋ノ原 萩です」

萩は楓に微笑んだ。

「 もう大丈夫ですよ。あの声のものは結界を張ったので、屋敷内には入ってこれません」

「 ほ、本当に！ …よかったあ」

楓は安心した様子だった。

「…しかし、名を聞かれても決して、答えてはいけません。何も言わずにただ、じっと、声のものがいなくなるのを待つのです」
その言葉を聞き、楓は頷いた。

冥鬼は冥魂を持つ人間に名を尋ねてくる。

もし、それに答えれば冥魂の放つ結界が弱まり、冥鬼は人間に触れることが可能となる。

そして体内の冥魂を抉り取る。

抉り取られた人間は死ぬ。

冥魂はいわば、第二の心臓のようなものだ。

…完全に夜が更けた頃。

何処からか不気味な声が聞こえてきた。

「名ヲ、名ヲオシエロ…オマエノ名ハ…ナンダ…ナンダ」

萩たちは声のする方に目をやると、そこには塀の上で鋭い目つきで

こちらを見る冥鬼の姿があった。
しかし萩たちに気付いたのか、逃げ出して行ってしまった。

「…僕たちに気付いたみたいだね。
槍羅さん、僕たちが戻るまで絶対にこの中からは出ないでください！」

「は、はい。わかりました…」

「行こう！ 蒼全！！」

「ああ！」

二人は塀を飛び越え、逃げ出した冥鬼を追っていった。

…これから先が最初の現状にあたる。

「はあアアア！！」

蒼全は水龍を呼び起こし、冥鬼めがけて放った。
しかし、冥鬼から避けられてしまった。

「チツ、ちょこまかと動きが速い 逃がすか!！」

蒼全は再び水龍で挟み撃ちをし、冥鬼を捕らえた。

冥鬼は逃げようとしたが、水龍が身体に巻き付き、身動きがとれな
いでいた。

「萩、今だ!！」

萩は言霊を唱え始めた。

言霊コトダマとは、式神師が冥鬼を祓う際に使う清めの言葉のようなもの。
式神師は言霊に冥鬼たちの穢れを祓うための「願い詞」を込める。

「欲は岩のごとく崩れ落ち、穢れは風と共に去りゆく時、縛られ
し魂を今、解き放て!！」

萩は札を取り出し、冥鬼へと投げつけた。

すると、冥鬼の姿はポウっ と消え、その後白き灯し火となり、ス
ウ っと天へと昇っていった。

「…ふー、 依頼完了!！」

「ああ。終わったな」

「うん。じゃあそろそろ、槍羅さんの屋敷へと戻ろうか?
蒼全」

その時。

「あゝあ。なにあたしの冥鬼被ってんのさー」

「!?!」

萩と蒼全はバツ　!と声のする方に目を向けた。

そこには薄茶色のくせのある長髪を赤紐でツインテールにしており、褐色の瞳を持つ少女。

齡、十ぐらいの少女が築地の上で足を組み、座った状態でこちらを見ていた。

「なにあたしの邪魔してんのさ。式神師」

「君は　!?!」

「なにさ。あたしの名は刹那^{セツナ}。我らの主^{アルジ}の覚醒のため、冥魂を頂いてるだけさ」

「主^{アルジ}つて…君らの主?　それに覚醒つて…!」

「あんたらには関係ないよ。邪魔しないでくんない?」

刹那はツンとした態度で後ろを振り返った。

「えッ!　あつ、ちよつ　!?!」

その瞬間、刹那はスッと暗闇の中に姿を消していった。

「
…」

萩と蒼全、二人のなかで沈黙が続いた。

…だが、最初に萩が口を開いた。

「あの子は一体」

「『我が主の覚醒』とか言っていたな…」

蒼全も口を開いた。

「…もしかしたら今、何かが起ころうとしてるのかもしれない。
い。」

…だけど今は、槍羅さんの屋敷に戻る事が先決だ。戻ろう、蒼全！」

「そうだな」

二人はその場を後にした。

その後。

家へと帰った萩と蒼全は平穏な一日を過ごしていた。

「ふあ〜…」

萩は眠そうにあくびをした。

「萩くん、なんだか眠そうだね」

お茶を運んできた東雲が萩の前に湯呑を置く。

「うん 昨日の夜もずっと動きっぱなしだったからさ〜」

萩は東雲が注いでくれたお茶を飲みながら一息つく。

「萩、少し休んだらどうだ？」

蒼全もお茶を飲みながら言った。

「…ん〜…じゃあ、ちょっと一休みしようかな。」

あ、東雲。お茶ありがとう」

萩は優しく微笑み、自分の部屋へと向かった。

部屋に戻る萩を心配そうに見ていた東雲が口を開いた。

「萩くん。少し疲れているみたいだね…」

「ここ最近、依頼が詰まってたからな」

「この頃忙しいよね…。蒼全も休まなくて大丈夫？」

「ああ。俺は平気だ」

「そう。じゃあ、お茶入れてこようか？」

「悪いな、東雲」

「ふふっ。いいよ」

東雲は微笑み、お茶を注ぎにいった。

蒼全はふと、空を見上げた。

空では、日がちょうど真南に昇り、少し肌寒い風が吹いていた。

萩は夢を見ていた。

「…しか かった…」

(……これは…僕がたまに見る夢だ)

「あの時は…するしかなかっ
」

(……見るたび、いつもあまりよく聞き取れないな。

臃にしか見えないけど、あれは…父上と…母上……?)

「本当にすまなかった…」

(……誰かに謝ってる…。 ……あれは…誰だろう？)

そこには、地にまで届く白銀の長髪の青年らしき姿があった。

(……やっぱり、顔がよく見えないけど、僕の知っている誰かに似
てる。 ……あれは…)

冥鬼の影 闇夜の少女 一刻 *

「ぎ…はぎ…萩…!!」

「…!!」

萩は目が覚め、ガバツと身体を起こした。

「萩、どうした!? 軽くうなされていたぞ」

横に目をやると、蒼全が心配そうに萩の傍にいた。

…その後、萩はハア…と息をもらし、布団へとゆっくり倒れた。そして、額に手を翳しながら一言。

「父上たちの夢を見たんだ」

「…!! あの夢か!?!」

「うん…」

「今度はどうだった!?!」

「ううん、駄目だった…。やっぱり顔が見えない」

「…そうか」

「 だけど、見るたび、あの姿を思い出しそうなんだ。誰かに似てる 僕の知っている誰かに。そしてたぶん、父上が謝っていた人が父上たちや 皆が殺された事について、何か知っていると思うんだ」

「 …途中で起こしてすまない」

蒼全は途中で起こしてしまった事を悔やんでいた。

「 …！？ 蒼全のせいなんかじゃないよ！ 僕もほら、夢が覚めそうだったんだし」

萩は少し驚いたが、蒼全に優しく声をかけ、微笑んだ。

「 …そういえば、東雲は？」

ふと東雲のことを思った。

「 …東雲は少し外に出ている。夕飯の材料を買いにだとかで。それと、言い忘れていたが…今、優利たちが来ているぞ」

「 …えっ!？」

…その時、後ろの襖が開き、声がした。

「 ちょっと入ってもいいかな? 」

そこには、若葉色の瞳に細長い眼鏡をかけており、深緑の長髪で、肩のところまで横に結っている少年が立っていた。

名を桐沢^{キリサワ} 優利^{スグリ}という。

彼もまた、緋ノ原家 同様、桐沢家一族の式神師であり、現当主である。

萩 同様、年齢、十五。

「 あっ、ごめん!! ……起こしたかな? 」

慌てた様子の彼。

「 ううん。僕も今起きたところなんだ 」

「 あ、そうだったんだ…。…よかった 」

優利は安堵のため息をついた。

「 ! そういえば、ここに来る途中、萩の好きな羊羹^{ヨウカン}を買ってきたんだ。

皆で食べようと思ってね 」

「 本当!?! 」

嬉しそうに、声のトーンが上がる。

「うん。だからさ、向こうの座敷で食べよう。蒼全も一緒に」

「すまないな」

「ありがとう。優利」

蒼全と萩は優利に礼を言った後、座敷へと向かった。

座敷では、一人の姿があった。

唐紅色の短髪に深紅の瞳を持つ青年。

名を蘇芳^{スオウ}という。

優利と契約を結んだ式神。

外見は他の式神同様、齢、十七。

「蘇芳、久しぶり」

「ああ。久しぶりだな」

萩は蘇芳と挨拶を交わした後、周りを見渡しながら優利に話しかけた。

「…あれ？今日は三人じゃないの？時雨さんは？」

「今日は用事があって一緒に来てないんだ。

朝、母上から文が届いて、時雨に手伝ってほしいって書かれてて、それで今は、本家の屋敷の方に行ってるんだ」

時雨は優利と契約を結んだ式神だ。

「ふーん…そうなんだ」

「うん。そういえば、東雲さんの方は？ 今日姿が見えないようだけど」

「なんだか今、夕飯の買い出しでちょっと出てるみたい。ねえ？ 蒼全」

「ああ。それで俺が萩の傍にいる代わりに、留守番を任せられたんだ」

「…へえ」

納得したような様子で優利。

その時、ガラツと玄関先で音がし、東雲が帰ってきた。

「ただいま」

東雲は座敷の襖を開いた。

「おかえり。東雲」

萩が笑顔で出迎えた。

「おかえりなさい。東雲さん」

優利も笑顔で出迎えた。

「あつ！！ 優利様！ 蘇芳！ お久しぶりです」

とても驚いた様子。

「 どうしよう……。優利様たちがいらっしやるとは知らず、茶菓子を買ってこなかったよ。」

少し焦る彼女。

「 あ、お気になさらず。ここに来る途中、羊羹を買ってきたんです。東雲さんもどうぞ。」

優利は羊羹を見せた。

「 い、いいんですか！？ ありがとうございます！」

えっと、じゃあお茶を次いできますね。」

東雲は急ぎ足でお茶をいれに行った。

その後、皆は楽しい一時を過ごした。

…その夜

萩は一人、縁側で月を見ていた。

「今日は満月かー…」

夜空に輝く月が、辺りの闇を照らしていた。

「そういえば、兄上もこうやって月を見るの好きだったなー…」

萩は二年前に亡くなった兄の事を思い出した。
兄、緋ノ原^{ヒノハラ}相模^{サガミ}は萩の二つ上で、二年前に病気のために亡くなった。

「兄上…」

萩は月を見ながら呟いた。

すると

「萩は本当に月を見るの好きだな」

「！！！」

萩は振り返った。

そこには蒼全がいた。

「えらい驚きようだな」

蒼全が驚いた様子で隣に座った。

「ハハッ ごめん…。少し驚いちゃって」

萩は少し笑いながら言った。

「…どうした。何か考え事でもしてたのか？」

少々心配した面持ちで萩に尋ねる。

その言葉に

「…うん。ちょっと兄上の事をね、…思い出してたんだ。

今日のように月が出ている夜はよく、二人で月を見たんだ…」

なんとも言えない悲しい眼差しで月を見上げる。

彼の横顔の背景の暗闇がより一層、彼自身の心の闇をも映し出す。

「相模の事が…。俺は会った事ないんだよな…」

蒼全も萩と同様、なんともいえない眼差しで月を見上げた。

「…うん。　　けどもし今、僕が当主じゃなかったら、
…蒼全とも　東雲とも会っていなかったのかもしれないね」

「…!!」

蒼全は萩が此方に向けた、持ち前の優しい言葉かつ微笑みに少し驚いたが、
月を見ながら微笑んで言った。

「…　　そうだなあ…」

萩の先程の様子で分かった事。

それは自分たち…蒼全…東雲に会えた事を心から喜んでい
る事…。

25

…と、その時

二人の頭上から声がした。

「萩様ああ〜!!!!」

「!?　　えっ…」

「萩様」と呼ぶ声がだんだんと近づいてきた。

萩は上を向いた。

すると、屋根から幼女が萩の顔へと、ぽふっと落ちてきた。

「んのあつ!?!?!」

萩はすつとんきょうな声をあげた。
その次に、蒼全の頭にもう一人の幼女が屋根から、ぽふつと落ちてきた。

「……………」

蒼全はただ、沈黙のままだった。

萩の顔に落ちてきた幼女は、毛先を揃えた短髪の黒髪に、
袂が長く、完全に両手がすっぽりと隠れるぐらいのぶかぶかの着物を着ていた。

名を雛芥子ヒナゲシという。

冥鬼ではあるが、人に害は起こさない。

萩たちと仲が良く、たまに家に遊びに来る。

蒼全の頭に落ちてきた幼女は、毛先を揃えた長髪の黒髪で、髪型が
違うだけで他、容姿は

雛芥子同様。

名を雛菊ヒナギクという。

雛芥子と雛菊は双子の冥鬼で、いつも二人で行動している。

「萩様、こんばんわあ〜」

萩の顔の上で笑顔の雛芥子。

「こ、こんばんわ。雛芥子…お、重い…」

「こんばんわ。萩様。こんばんわ。そー様」

隣では、おしとやかな雛菊。

「…雛菊。『そー様』はやめろって…」

「なにを言われるのです。そー様はそー様です」

「……」

困った様子の蒼全。

「こんばんわ。雛菊…」

同じく、萩も困っていた。

その様子に気付いた雛菊は

「あつ！ 雛芥子！！ 私たちが降りないと、萩様とそー様が

！？！」

「ああ！！」

雛芥子と雛菊は軽い動きで一人から降りた。

「はあ…」

二人は同時に息をはいた。

「大丈夫ですか？ お二人とも」

心配した様子の雛菊。

「俺は、別に何ともない」

蒼全は答えた。

「僕もなんともないよ。ただちょっと、息苦しかったけど」

萩もなんとか答えた。

「ごめんなさい。つい、二人ではしゃぎ過ぎちゃって えへへ」

「大丈夫だよ、雛芥子。そういえば、二人ともどうしたの？
こんな夜遅くに」

萩が不思議そうに尋ねた。

「今日は満月で綺麗だったから、二人で遊んだの。
そしたら、萩様たちを見つけたから遊びに来ちゃったの」

雛芥子が笑顔で言った。

「そうだったんだ。なら、一緒に月見でもしようか？」

微笑む萩。

「えっ！いいの？ 萩様?? 一緒に見て!？」

嬉しそうに尋ねる雛芥子。

「 うん、いいよ。皆で見よう。ねえ？蒼全」
「 ああ」

その言葉を聞き

「 やったあ！ 雛菊、いいだつて！！」

「 …… やはり、萩様たちはお優しいです」

雛芥子も雛菊も喜んだ。

ちょうど その時

「 あれ！？ 雛菊と雛芥子じゃない！」

東雲が奥からお茶と茶菓子を持って笑顔で現れた。

「 あっ！ しー様だあ！！」

「 しー様だあ！！」

二人はキャツキャツと嬉しそう。

「 どうしたの？ 二人とも」

「 遊びに来たんだって」

萩が雛芥子を抱きながら言った。

「 …… 二人とも遊びに来てくれたんだ〜 嬉しいな。

…… じゃああなたも、お菓子でも食べる？」

「わあ〜〜い!」

雛芥子と雛菊は共に喜んだ。

「はい。どお〜ぞ」

「わあ〜!」

二人はお菓子に飛びついた。

「しー様、ありがとう」

二人の声はよく合う。

東雲はお菓子を夢中で頬張る二人を見ていてふと、不思議に思った。

「そついえば、雛菊と雛芥子って蒼全や私の事を『しー様』や『そー様』って言うよね？」

萩くんは名前なのに。…どうして？」

「ああ。それは俺も思った」

蒼全もうなずいた。

「しー様やそー様は私たちにとって言いやすいんだもん。萩様は『萩様』がいいんだもん。ね？雛菊」

「はい。雛芥子の言うとおりです」

「…そうなんだ。まあ、二人が言いやすいんならそれでいいんだけどね」

東雲は二人の可愛らしい様子に笑みを浮かべる。

それからの間、皆は楽しい時間を過ごした。

…これから先、萩たちを待ち構えるものが何なのかまだ…誰も知るよしはなかった

く冥鬼の影 闇夜の少女く 一刻 【完】

く消えゆく子供 現代の神隠し く 一刻(前書き)

ある日、萩たちの家に一通の文が届いた。それは「現代の神隠し」との内容だった。

萩たちはさっそく依頼者のもとへと行ったが、そこでは…

く消えゆく子供 現代の神隠し 二刻

雲一つなく、青々とした空が広がっており、萩たちは清々しい朝をむかえていた。

「んっ！いい天気」

東雲は背伸びをしていた。

「よしっ！！今日も一日がんばりますかっ！！」

東からの眩しい太陽を見ながら、気合いを入れていた。ふいに東雲は、玄関先に置いてある文を見つけた。

「あ、文が届いてる。えっと 緋ノ原 萩様…って事は、仕事の依頼かも！」

その後、文を持ち、居間へと戻った。居間では蒼全が早くも起きてきていた。

「蒼全。萩くん、起きてきた？」

「いや。まだ起きてきていない」

「もう、萩くんたらあ」

「まあ、いつもの事だからな」

「私、起こしてくるね！」

「 どうした、東雲。今日はやけに厳しいなあ」
「 さつき、文が届いてたの。萩くん宛てに」
「 萩宛てに？ という事は仕事の依頼…」
「 たぶんそう。だから今日は起こさないかね」

一方、萩はというと…

静かに熟睡していた。

そこへ、東雲が勢い良く襖を開け、入ってきた。

「 萩くんっ！」

すると、萩がこちらを向きながら熟睡していた。
東雲は萩の寝顔を見た。

(…… かつ かわいいいゝ 萩くんの寝顔おゝ！ いつ見ても、癒されるうゝ！！)

…って私、何やってるんだあ！ 今は そう思ってる場合じゃなーいっ！！)

東雲は心で思った事に、一人で突っ込んでいた。

「 萩くん！ もう早く起きないと！！！」

萩は東雲から掛け布団を勢いよく剥がされた。

「 んゝ… まだ肌寒いよ、東雲ー」

萩は布団一枚になり、寒そうに布団の中で丸まっていた。

「 萩くん、今日は長く寝とけない理由ができたんだよ！ 萩くん宛てに文が届いたんだから！！！」

「 僕宛てにゝ？ …… ふああゝ… 」

萩は大きなあくびをした。

「 そう！ 萩くん宛てに！！ だから早く 中を見ないと！」

その後、萩は立ち上がり、背伸びをした。

「 んっ！ 今日も善い天気だね。おはよう、東雲」

「 もお、萩くんたらー おはよう」

二人は居間へと降りていった。

居間では蒼全が一人ぼつんと居た。

「おはよう。蒼全」

「ああ、おはよう。今日は叩き起こされてきたな」

「あはは 叩き起こされちゃったよ」

「それはそうと。文が届いてたらしいぞ。仕事じゃないのか？」

「そうだった！ っとこの文か……誰からだろう？」

萩は文を開いた。

「えつと……」

横からは蒼全や東雲が中身を見ていた。

『 式神師一族、緋ノ原家当主様。』

この度は、依頼を存じ上げようと思い、この文を書かせていただきました。

我らの村、神楽村^{カグラ}で最近、村の子供たちが次々と居なくなるという事が起こっており、我々も皆で探しましたが、一向に一人として見つからず、戻って来ないという現状です。

どうか、子供たちをお助けて下さい。お願い致します。

神楽村 代表：日向^{ヒユウガ} 亜紗葉^{アサハ}』

との内容だった。

「神楽村って たしか、阿柰狗羅ノ神アナクラノカミが居る山の隣の村だよな…」
蒼全が不思議そうに言った。

「うん そうだよな。」
阿柰狗羅ノ神ならば、隣村で起こっている出来事に気付いても
おかしくないはずなのに…」

「まあ 神だからといって何もかもが、お見通しできるといっ
けでもないしな…」
「そうだよね…」

萩たちが互いに納得しあっていると、そこへ東雲が話に入ってきた。

「でもこんな今どき、珍しいよね。神隠しみたいななんて」
「そういえばそうだね。僕も今までの依頼の中でこんなのは初め
てだ。」
子どもが次々といなくなるなんて」

「ただの迷子じゃないのか？」
「でも、蒼全。一人も帰ってこないなんておかしいよ。
…やっぱり、まずはこの、神楽村に行ってみないとね」
「そうだな」
「じゃあ、早めに支度をしよう」

萩がその場で立ち上がろうとした時

「ごめん、萩くん。今回、私はちょっと…」

東雲が申し訳なさそうに萩に声をかけた。

「どうしたの？ 東雲。どこか気分でも悪いの？」

萩が心配そうに尋ねた。

「いや、そのちょっとー 時雨ちゃんに誘われてて…」

「そうなんだ。時雨さんに。…どこに行くの？」

「それが…私も詳しくはわからなくて」

「うん。…じゃあ、二人で楽しんできてね」

萩は微笑んで言った。

「いいの？萩くん！！ ありがとう！」

喜ぶ東雲。

その後

「じゃあ、そろそろ行きますか！」

「あゝ」

「東雲、行ってくるね」

萩は後ろを振り返った。

「うん、二人とも気を付けてね。なにかあったら呼んで！すぐに駆け付けるから！」

「ありがとう。東雲」

「じゃあ、俺らは先に行くか」

腰をあげる蒼全。

東雲は二人を見送った。

その後、家の中で東雲が外出準備をしていると玄関の戸が開く音がした。

「御免ください」

「あつ、はい」

東雲はバタバタと階段を降りていった。

玄関では、おしとやかな雰囲気女性が一人、立っていた。

肩までの長さで上髪の部分を後ろで結った、毛先の揃った薄朽ち葉色の髪に香色の瞳をもつ女性。

名を時雨^{シグレ}という。

優利と契約を結んだ式神であり、外見は他、式神同様、齡、十七。

「おはようございます、東雲さん。お迎えに上がりました」「

時雨が優しく微笑む。

「おはよう、時雨ちゃん。

ごめんね、まだ準備が出来てなくて…あとちょっとだから、居間で少し待っててもらってもいいかな」

落ち着きのない様子の東雲。

「あつ、いえ…私の方こそ、予定時間より早めに来てしまっ…」

「本当にごめんね」

東雲はまたバタバタと階段をかけたぼっていった。

少し経って

「ごめん、時雨ちゃん。お待たせ っ て、あぁ…!!」

東雲が階段から勢いよく滑り落ち、痛そうに尻をついていた。

「！！ 東雲さん大丈夫ですか！？」

時雨が心配そうに、慌てて駆け寄ってきた。

「あはははは…大丈夫 だけどちよつとばかり、痛かったかも」

苦笑いの彼女。

「本当に大丈夫ですか、東雲さん！腰を痛められてませんか？」

「大丈夫、このくらい。毎日のことだし…」

「でも…」

「大丈夫だってほら、よつと」

東雲は立ち上がった。

「ごめんね、さっきから驚かせる事ばかりで」

東雲は少々、頬を染めていた。

「あ、そうだ。時雨ちゃん。まだ聞いてなかったんだけど、今日って何処に行くの？」

思い出したように時雨へと尋ねた。

「あ、ああそうでした。まだ、東雲さんに行き先を告げていませんでしたね。」

えっと…その、今日一緒に行こうと思った所はですね 実は…

「

その頃、萩たちはどうと…

ガラガラッ

「蒼全…。なんで僕たちがこんなところを通らなくちゃいけないのかな…」

萩たちは崖沿いを通っていた。

「俺だってこんな所を通るとは思ってもみなかった」

「よりによつてなんで、今日、この山をぬけるための唯一の橋が架け崩れてるんだ…」

萩は愕然とした様子だった。

「なんでも、昨日の強風で壊れたとか 看板に書いてあったな」

「はあ…。帰りたい気分だよ」

「なに言ってるんだ、萩。依頼は最後まで果たさないといけないって、自分からいつも言ってるじゃないか。さっ、早く先進むぞ」

先頭に行く蒼全は一人、先に進もうとしていた。

「え、あつ蒼全、ちょっと待っ……」

その時

ガラッ……

「えっ……」

一瞬、萩は宙を浮いた。

萩の異変に気付いたのか、蒼全は後ろを振り返った。

そこには、足元の崖が崩れ、宙に浮いた萩がいた。

「ん なっ……!?!?」

萩は驚きの声をあげた。

萩の体がだんだん下へと向いていく。

蒼全はとっさに手を差し出し叫んだ。

「萩 イイ イイ イイ ……!?!?!?!」

「うわ ああ アアア ……」

声が段と小さくなっていく。

萩は崖の下の森へと、真っ逆さまに落ちていった。

く消えゆく子供 現代の神隠し 二刻*

ガサガサガサ バサツ ドン!!!

萩は森の木々の間を通過して枯れ葉の山の上に落ちた。

「 いったく・・・」

萩は仰向けの状態だった。

「 萩いいイ つ!! 大丈夫かあ

!?!」

崖の上では蒼全が萩の身を案じて叫んでいた。

「 うううん・・・」

萩は仰向けのまま、まだ痛そうに答えた。

とその時

「 ほお、今日はまた、変わった落ちモノだな」

萩の頭上で声がし、顔を覗き込む者がいた。

白灰のくせのある長髪に銀の黄色混じりの瞳をもつ青年。
名を阿柰狗羅ノ神アナクラノカミという。

通称：阿柰狗羅様。

外見は蒼全たちとさほど、変わらないようだ。

本来の姿は犬神だが、いつもは人間の姿をしている。

昔からこの、狗羅ノ宮山クラノミヤザンの守り神として崇められてきた。

「阿柰狗羅ノ神！」

萩はとても驚いた様子でいた。

「すごい驚きようだなー！ 緋ノ原家当主」

萩 同様、阿柰狗羅ノ神も驚いた様子だった。

「阿柰狗羅ノ神、どうしてこちらにいらっしゃるのですか！」

「おもしろい質問だな。どうして って、ここは俺の居る山だからなー」

…それに、珍しく、人の入った気配がしたから様子を見にきたんだが…緋ノ原家当主。

今日はまた随分、変わった所から来たなー」

阿柰狗羅ノ神は不思議そうに萩を見た。

「いえ…。その、落ちてきたのですが…」

「なんだ、落ちてきたのか！ てっきり、今日は違った所から会いに来たと思っただぞ！」

笑いながら言っている阿柰狗羅ノ神を見ながら、萩は

「……………」

ただ、呆れながらも見る一方だった。

その時、崖の上からと音がした。

見ると、蒼全が崖を上手く滑り降りてきていた。

そして、地へと足をつけ、萩の方へと駆け寄って来た。

「大丈夫か、萩！どこか怪我したか」

心配した様子の蒼全。

「大丈夫。なんともないよ。ただ少し、衣の袖が切れただけ」

右頬に少し擦り傷を負ってはいたが、萩は平気そうに言った。

「すまなかった…。俺が急がせたばかりに…」

蒼全はひどく落ち込んでいた。

「なに言ってるのさ、蒼全。僕がただ、弱音をはいて、注意不足だったただだから」

蒼全が謝る事じゃないよ」

萩は逆にあたふたと焦っていた。

「だけど、しかし…」

その時

「お話し中、申し訳ないけど、俺の存在、忘れてない？」

阿柰狗羅ノ神が二人の後ろから暇そうに声をかけた。

「阿柰狗羅ノ神。…いつのまに其処にいたんだ？」

蒼全がとても驚いた様子でいた。

「いつのまに…って、蒼全、おまえなあー」

「最初っから僕と一緒に居られたんだよ。阿柰狗羅ノ神は」

「そうだったのか…気付かなかった」

まったくもって気付かなかったと言うように、ぼかんとした様子の蒼全に

「…てめえ」

己を完全に忘れられていた事に怒りをおぼえたのか、ヴうゝうゝ…と、犬のように唸る阿柰狗羅ノ神。

「ちよっ　まあまあ二人ともー」

萩は二人の間に入った。

すると、阿柰狗羅ノ神がなにかを思い出したように口を開いた。

「…それはそうと。大丈夫か？ 緋ノ原家 当主」
今頃になって、阿柰狗羅ノ神は萩の身を安じてきた。
それに対し

「……………」

呆れる一方だった。

同じく、蒼全はというと…

（ 普通、最初にかける言葉がそれだろう… ）

心の中で呟き、思っていた。

「 時に、緋ノ原家 当主 」

（ 今度はなんだろう… ）

阿柰狗羅ノ神の言葉に萩は思った。

「 また、どうしてあんな崖添いを行ってたんだ？あの先は神楽村
だが…例の神隠しの件か？ 」

その言葉に萩は

「 やはり、阿柰狗羅ノ神もお気付きでしたか 」

「 村の奴らが騒いでたからな。…それに、神楽山の方で夜、気配
を感じて幾度か様子を見に行っただが… 」

「 村ではなく、神楽山の方で…ですか？ 」

「ああ。それに、山に近づくと気配が消えて、探そうにも探せなくてな……」

「……」

萩は阿耨狗羅ノ神の言葉を聞き、考えていた。

（ 昼間ではなく夜……。近づくると気配が消える……。）

もしや、その気配の主は気配を消せるほどの強い力の持ち主なのか…… ）

「 阿耨狗羅ノ神。その気配は冥鬼でしたか？」

萩は尋ねた。

「 最初は俺も冥鬼だと思っていたが、気配が消える直前に微妙だが、

冥鬼とは少し違った気配が交じっていたな。

だが一瞬しか感じれなかったから、なんだったのかはわからない」

「 …… そうですね……」

「 まあ、後の事は緋ノ原家当主たちに任せる」

阿耨狗羅ノ神は、萩の肩をポンポンと軽くたたいた。

「 おっ！ そうだ。萩、蒼全！ 俺が村まで連れてってやるよ」

そう言うと阿耨狗羅ノ神は萩たちを風の膜に包んだ。

「 …… 」

驚く二人。

「なんだ、そんなに珍しいか？」

「その、…初めて阿柵狗羅ノ神の力を目の当りにしたので」

「そういえば、人前で余り、力を使わなかったな」

少し経って

萩たちは村の入り口近くまで連れていってもらった。

「ありがとうございます。阿柵狗羅ノ神」

「な」に、気にするな。んじゃ、後は頼んだぞ」

「はい」

萩たちは神楽村へと入っていった。

その二人の後ろ姿を見送っていた阿柵狗羅ノ神は

「… ったく、互いに知り合って一年も経ってないからって、心配

しすぎなんだよ。蒼全は」

そう呟くと、もと居た山へと帰っていった。

…戻ってすぐに

「ほおー。神楽村へと行ってきおったか」

何処からか、森の中で老人の声が聞こえた。

「うお、ビックリした！！…なんだ、ジジイか。

いきなり驚かすなよ。気配も姿も消しやがって。…いつ戻ってきたんだよ」

「言霊師が崖から落ちてきた時からじゃよ」

「『言霊師』って、いつの時代だよ。

今では『式神師』っていうちゃんとした名があるのをジジイは知らないのか？」

「わしは『言霊師』と言われていた頃から出雲仙人として今まで生きてきたのじゃ。この呼び名でよい」

出雲仙人イヌモセンニンは言った。

「まあ いいけどさ」

阿耨狗羅ノ神はふわっと、木の幹に座った。

「…時に、おまえさんは行かなくてもよいのか？」

相手は、冥鬼は冥鬼でもあやつが降りているのじゃぞ」

出雲仙人は阿耨狗羅ノ神に尋ねた。

「…緋ノ原家当主が以前にまして、どの位成長したかを見極める
ためにも まずは様子見さ」

阿耨狗羅ノ神は神楽村の方を見つめながら、薄ら笑もを浮かべた。

その頃、萩たちは

神楽村へと入っていた。

そこは緑に囲まれ、沢山の民家があり、村のほとんどを水田が広が
っている大きな村だった。

「ここが神楽村か」

「空気が澄んでるな」

萩と蒼全は言葉を交わした。

「 …… 一見、平和そうにも見えるんだがな 」
「 僕もそう思うよ。でも現に、村の子どもたちが居なくなっているのは事実だからね 」

萩たちが話をしていると、

「 おや、見慣れない顔だね。他の村の人かね？ 」

一人の村人が話し掛けてきた。

「 あつ、…いえ。こちらの村の方に依頼を頂いた式神師です 」

「 依頼？ ああ もしや、貴方様が緋ノ原家当主様で？ 」

「 はい 」

「 あゝ、いやいや、お待ちしておりました。では、日向家ヒユウガにご案内致します 」

萩たちは、村人について行った。

少し歩いて

「 こちらです 」

案内された先は旅館だった。

「 ここは 」

「 この村で唯一の旅館で日向家が経営しています 」

…それから少し経った頃。

村人たちが集まってきた。

「あの方が式神師様ですって」

「当主って言うから、もっとこう、大人だと思っていたが…まだまだ子供じゃないか」

「本当に当主様なのかしら…。式神師様って皆、あんなに若いの…？」

周りの大人が次々と言う中、萩はただ黙って聞いていた。

すると、騒ぎを聞き付けたのか旅館の中から一人の女の子が入り口を開けて出てきた。

「どうしたんですか？皆さん」

すると

「アサハ亜紗葉ちゃん！」

村人がザワザワと騒ぎだした。

肩までの長さの黒髪に漆黒の瞳をもつ少女。
外見からして十五、十六だろうか。

亜紗葉は村人たちを一度見た後、チラツと横に居た萩たちを見た。

「あなた方は」

「あ！　　僕らは依頼」

「もしや、式神師様でいらっしやいますか？」

萩の言うなか、亜紗葉は唐突に聞いてきた。

「…はい」

萩は目をぱちくりさせ、驚いた様子で答えた。

「お待ちしておりました。　さあ、中へどうぞ」

萩たちは一礼をして、中へと入っていった。入ってすぐの所で、旅館の関係者たちが横一列に並んでいた。

「いらっしやいませ」

萩たちはまた、一礼をして上がっていった。…すると

「　ああ〜やつぱり旅館つていいねえ〜　時雨ちゃん」

萩たちの前を二人の客が通った。

その二人を見て、萩と蒼全は驚いた。まず先に口を開いたのは萩だった。

「東雲に…時雨さん!」

その言葉を聞き、東雲と時雨は萩たちの方へと向いた。

「萩くん…蒼全！」

東雲と時雨は萩たち同様、驚いた様子だった。

「どうして此処に」

蒼全も不思議と尋ねた。

「いや、私たちはこの旅館に泊まりに来てて」

萩たちの会話を目の当りにして聞いていた亜紗葉が不思議そうに尋ねてきた。

「お二人は、式神師様のお知り合いで？」

「ええ」

萩は答えた。

「行くとは聞いていたが…まさか此処だったとは」

未だ、驚いた様子の蒼全。

すると、萩はハツとなにかに思い出したかのように口を開いた。

「…そういえば、どうして東雲たちは先に出た僕たちより早く此処に着いてるの？」

萩が不思議そうに尋ねた。

「どうしてって、途中、架かってたつり橋を渡ってきたんだよ。…そういえば萩くんたちが私たちより遅いって どうして？」

その言葉を聞き

「橋が架かってたあ!?!」

「う、うん」

萩と蒼全は顔を見合わせた。

「だが、俺たちが行った時はまだ橋が架け崩れてて」

「でも、私たちが行った時には橋はちゃんと架かってたよ」

すると、時雨が

「…そういえば、橋の前に看板がありませんでしたか?」橋は架け直されました』と」

「あっ! そういえば、そんな看板もあつたね」

すると

「そつ…そんなあ…」

萩はその場にペタンと座り込んだ。

「あんなにも苦労してここまで来たのに…水の泡なのか…」
「……………」

萩の言葉に蒼全も唯唯黙る一方だった。

「そんな、萩くん…蒼全まで…」

そんななか

「あのお……………」

亜紗葉がおろおろとした様子で声をかけてきた。

「え……………」

萩と東雲が同時に言葉を発した。

「あ、そうだった！こんな事をしている場合じゃなかった。
東雲、時雨さん。また後で」

萩はそう言つと、蒼全と共に亜紗葉に案内されて行った。
その後、東雲たちも部屋へと戻っていった。

途中、時雨が東雲に話し掛けた。

「東雲さん、萩様たちはご依頼を受けてこちらに来ていらっしやるんですよね？」

「ご一緒されなくてもよいのですか？」

「うん、大丈夫。私、萩くんに何かあったら直ぐに呼んでねって言うてるから。」

私はただ、それを待つだけの事だよ」

東雲は時雨に優しく言った。

部屋へと案内された萩たちは亜紗葉から話を聞こうとしていた。

「申し遅れました。私が依頼を致しました、日向ヒユウガ 亜紗葉アサハと申します。」

当旅館の女将代理をしている者です」

「女将代理さん ですか」

「はい。女将 私の母は今、急用で他の村へと行っておりまして」

「そうなんですか。それとあと一つ、お聞きしたかったのですが…」

亜紗葉さんはこの村の代表の方だとか」

「…はい。しかし、見ての通り私はただの代表なだけで、村長ではありません。」

先月、村長が亡くなられてからはまだ次期、村長が決まっておらず…皆の話し合いの結果、日向家が次期村長が決まるまでの代表として話が進んだのです」

「それでさっき、村の方々があんなにも驚いて」

「皆さん、驚きすぎなんですよ。私はそんなに偉い立場じゃないのに…」

…その言葉を聞き、

「僕も、皆に『当主様』と呼ばれるような者でもないのに」

「なぜです？」

「僕はまだ、当主という名の器には経験にしる実力にしる、まだ程遠いのです」

「あの…。失礼かとは思いますが、当主様はいつ頃…」

「式神師は満十五で、現 当主から、当主の座を受け継ぎます。

しかし、僕はまだ当主となって早 十カ月。まだ一年も経たずの未熟者なのです…。それで」

亜紗葉は黙って話を聞いていた。

「当主様も、とても苦労されているのですね…。

わかりました。では、まだ『当主様』に慣れていらっしやらないのであれば『萩様』と

お呼びしても宜しいですか？」

その言葉を聞き萩は笑顔で

「あつ いえ『さま』はつけなくても」

「いいえ。次期当主となられる御方なのでつけさせて頂きます」

亜紗葉は微笑んだ。

「…」

萩は少し照れ臭そうに下を向いたままだった。

「…では、萩様。例の子どもたちの件ですが…」

亜紗葉が話を進めようとした時

「亜紗葉！村の人から聞いたんだけど、式神師様が来てるって…」

バタバタと足音を響かせながら、その声の主が障子を勢いよく、開いた。

萩と亜紗葉は声の主を見上げた。

焦茶色の長髪に、黒色の瞳をもつ女の子。

外見は亜紗葉とあまり変わらないくらいだ。

「あっ…」

女の子は驚いた様子だった。

「りっちゃん…!」

亜紗葉が言葉を発した。

「…っ…っめん！お話し中…」

女の子は障子を閉め、出て行った。すると

「あつ、ちよつと待って、りっちゃん。」

今から式神師様に子どもたちの話をするから、りっちゃんもこの村の者として、話に立ち合ってほしいの。それに、りっちゃんの事も紹介したいから……」

その言葉を聞き

「えっ、あたしも……いいの？」

「うん。だから、りっちゃん……」

障子を開いて女の子が入ってきた。

女の子は入って、左側に居た萩に気づき、目を向けた。

萩は女の子と目が合い

「初めまして」

微笑んだ。

その瞬間、女の子は顔を真っ赤にしておろおろとした面持ちで一礼をし、亜紗葉の隣に座った。

「萩様、こちらは」

「初めまして。峰藤^{ミネフジ} 律^{リツ}と言います」

亜紗葉の紹介に、律は自分で名乗った。

「初めまして、律さん。式神師の緋ノ原 萩と申します」
「緋ノ原 萩さん…」

律はボソツと萩の名前を繰り返した。

「お二人は」

萩が尋ねると

「亜紗葉とは幼い頃からの親友です」

笑顔の律。

「そうだったんですか」

萩が微笑む。

それから、話は進み…

「では、子どもたちが居なくなったのは、つい最近の事なんですかね？」

「はい」

萩たちの周りは張り詰まった空気に包まれていた。

「居なくなった子どもたちに共通点らしきものはありませんでしたか？」

「共通点？」

亜紗葉と律は顔を見合わせ

「いえ…。共通点らしきものはないかと」

首を傾げながら、亜紗葉は答えた。

「…最後に。子どもたちが神隠しにあう前になにか、前兆といったことは？」

「それも無いかと」

「…そうですね。わかりました。お話を聞かせて頂き、ありがとうございました」

「あつ、いえ。私どももお役にたてずに…」

萩と亜紗葉が言葉をなくした後、

「あの、当主様！居なくなった子どもたちを…」

律が萩に話し掛けていると亜紗葉が律の肩をつつき、耳元でコソコソと何かを話しているようだ。

そして

「あの、式神師様。…萩さんとお呼びしてもいいでしょうか？
亜紗葉から式神師様が当主様と呼ばれることに慣れていないとか…」

「 ……はい。宜しく願います」

最初は少々驚いた様子だったが、萩は笑顔で答えた。

「りっちゃん。次期当主様となられる御方にそんな、萩サンなんて…」

「いいんです。僕も、こちらの呼び名が嬉しいんです」

嬉しそうな彼。

「では、改めて。萩さん！ 居なくなった子どもたちをどうか見つけてください。お願いします！」

「必ず、子どもたちをこの村へ連れてきます…！」

…その後、亜紗葉と律が先に部屋を出ていった。

「 蒼全」

萩は隣の部屋で待機していた蒼全に声を掛けた。

「 ああ。聴いていた」

蒼全が言葉を返した。

「 さっきの話からして」

「直接、その神隠しにあったていう山に行く必要があるな」
「 そうだね」

そういつと、萩と蒼全は旅館を後にした。

…少し経って

萩たちは神楽山の森の中にいた。

神楽山は狗羅ノ山よりは、少し小さめの山で、昔は土地神が居たらしいが、今は居ないようだ。

「はあ…。この山って見た感じじゃわからなかったけど、案外広く感じるなー、…よっ」と

萩は横に倒れた木を跨いだ。

「だな」

蒼全も萩の後ろから来ていた。

「後、思ったんだけど、さっきから冥鬼の姿を見かけないよね。土地神も居ないからかな？」

「そうだな。だが、こうゆう山だからこそ、好き勝手に縄張りが沢山あってもおかしくないんだが…」

二人が話をしながらいっていると前方に黒翼の生えた人影がこちらに背を向け、片膝を立て、座ってた。何かしている様子だ。

先を歩いていた萩はその人影に気づき、立ち止まった。

萩の後ろを歩いていた蒼全は不思議そうに尋ねた。

「どうしたんだ、萩？」

「あれは…」

萩はその人影に近づいていった。

「…？」

その後ろを蒼全がついていった。

ザッ
ザッ

「…！」

足音に気付いたのか、その人影が後ろを振り返った。
その様子に、萩も驚きながらも

「 あっ ！ ごめん。驚かせちゃったかな。

…その 君はもしかして黒天狗クロテンゲ：だよな？ 」

そこに居た人影は、黒髪の長髪に橘色瞳タチバナを持ち、背中には闇色の黒翼の生えた少年。

外見は萩とあまり変わらないか、一つ上ぐらいだろうか。

下駄のようなものも履いている。
頬には泣いたあとが残っていた。

黒天狗は萩たちの言葉に

「 自分が…見えるのですか？ 」

「 うん、僕らには見えるんだ 」

その言葉に

「 いかにも。自分は黒天狗です。 あなた方は？ 」

「 僕は式神師の緋ノ原 萩 で、後ろから来ているのが僕の相棒の式神、蒼全 」

紹介されながらも後ろからやってきた蒼全が

「 萩、なにやって… 」

蒼全が萩の前に居た人影に気が付いた。

「 ……黒天狗　！　なんだ、やっぱり冥鬼はいたのか」

黒天狗は少し警戒した様子だった。

「 ……えっと、君の名を聞いていいかな？」

萩は黒天狗に尋ねる。

「 私はただの黒天狗です。名は元々からありません」

「 ……そう……なんだ」

萩はふと、黒天狗の手を見た。
土で汚れていた。

「 ……えっと、君はここでなにをしていたのかな？それに　泣いた
あとが……」

見ると黒天狗の座っている前には埋められた石があった。
墓石のようにも見える。

「 ……墓を……つくってたんです」

「 ……墓」

萩と蒼全は同時に言葉を発した。

「 ……はい。仲間の墓を」

「 ……その……詳しく話を聞いていいかな？」

…黒天狗は語り始めた。

「仲間と言つても、同じ黒天狗ではないのですが、ここでは私を含め、沢山の種類の冥鬼が、土地神がいないぶん、自由気ままに住んでいました。」

「しかし、数日前でしょうか…仲間の冥鬼が山のあちこちで遺体となつて見つけられました。その遺体は食い殺されており、ほぼ骨しか残つておらず周りには凄まじい量の血が赤黒く残っており、まだ乾ききつていないものもありました。次の日も、また次の日も。皆、警戒しあつていても犠牲が増える一方で…。」

そして、今日もまた、数少ない仲間が殺されており…残ったのは私一人だけとなりました」

その後、話し終えたのか、黒天狗は萩たちに

「式神師様、式神様。どうか、仲間を食い殺した者を見つけてください。」

そして、その後は自分が…」

萩と蒼全はその様子を見ていた。
そして

「うん。僕たちが必ず見つけるよ。絶対に…」

すると、黒天狗の瞳から涙が頬を伝い

「ありがとうございます」

萩は微笑んだ。そして

「じゃあ、いくつか聞いていいかな？」

「？」

「この神楽山に夜、なにか、力の強い冥鬼が来たりしてないかな？
見たところ 君も力が強いみたいけど 気配とか感じた
りしない？」

「…いえ なにも」

「じゃあ、村の子どもたちを見かけなかった？」

「村の子ども ！！？」

「うん。今、神楽村の子どもたちが次々と神隠しにあってるんだ」

「…じっ、自分はなにも…」

「…そっかぁー ありがとう。君も夜まで気をつけてね」

「夜まで ですか？」

「うん。夜まで… …じゃあ、僕らはまた、色々と散策しますか」

萩が後ろを振り返る。

「 そうだな 」

すると、萩がなにかを思いついたのか、振り返り

「 そうだ…！君にまた、お願いをしてもいいかな？ 」

萩は黒天狗に尋ねた。

「 为什么呢？ 」

「 この、神楽山で冥鬼たち 君の仲間の墓石の場所を教えてくださいませんか？ 」

なにか手がかりが見つかるかもしれないと思って。
僕たち、ここの土地勘は、まったくなくてね。

…墓石を巡るのは君にとって苦かもしれないけれど…お願いします
「 」

萩は頭を下げた。

その様子に蒼全と黒天狗は驚いた。

「 わかりました。仲間を…村の子どもたちを助けるためならば

…」

「 ！ ありがとう！ 」

「 ですから、頭を上げてください 」

「 あっ、あははは… 」

萩は照れ臭そうに笑いながら頭を上げた。

それから、萩たちは墓石を巡っていった。

途中、蒼全は大きな岩を見つけ、立ち止まった。

「萩」

「ん？どうした？蒼全」

前を行っていた萩と黒天狗が後ろを振り返った。

「あの大きな岩はなんだ？」

蒼全は岩の方を向きながら言った。

萩たちの左側の先の林の隙間から大きな岩が見えた。

「あ、あれは昔からある洞窟だったんですが、何かの理由で塞がれたんです。」

あの岩の後ろが入り口です」

黒天狗が説明した。

萩はスツと、目を細め、その大きな岩を怪しげに見つめた。
そして

「ふーん…行ってみよう」

萩たちは大きな岩の近くに行った。

「 さつき、この洞窟が塞がれたのって何かの理由って言ったけど それってなにかな？ 君は知ってる？」

「 いえ、この山に居た自分たちもなぜかは分かりません。

ただ、この洞窟は昔、土地神様が居られた場所なので今、居られない分、

むやみに中に入ってはいけないとだけしか…」

「 『土地神』 ねえ… 」

萩はじつと岩の中心を見つめた。

そして、蒼全と共に大きな岩の周りを見回った。

「 蒼全 動きそう？」

「 ダメだ。びくともしない」

「 手伝おうか？」

「 いや、…こんなに岩が大きいんじゃ、ここに居る三人がかりでも動かないだろ」

「 ……ということは、この岩じゃないってことか…。」

もし、動くんだったらこの中に神隠しにあった子どもたちが居ると思っただけだ」

「 だが、その力の強い冥鬼だったら出来るんじゃないのか？

子どもたちをさらって、冥鬼どもを食らった奴ならば」

「 でも、誰も見てないって…。…じゃあ、今夜あたりにも…」

萩は岩に耳をあてた。

「 なにか聞こえるか? 」

「 いや。風の音しかない 」

（ それに 異臭もしない。

風が入るぐらいの隙間があるんだから、もし子どもたちが冥鬼たちのように食い殺されて、この中にいたとしても、冥鬼より人間の臭いの方が強いはずだ。

今のところ分かる事は子どもたちが無事な事ぐらいか… ）

萩は心の中で呟いた。

「 ……どうします? 」

黒天狗が二人に聞いてきた。

「 先、進もつか 」

その後、萩たちは隈無く山を散策した後、旅館へと戻ってきた。

空では、日が南西の方角に傾き始めていた…

旅館へと着いた萩たちが草履を片付けていると律がパタパタと駆け寄ってきた。

「お二人とも、どちらにお出かけになっていたんですか？ 姿が見当たらなかったのよ」

「ちよつと、神楽山まで」

「！ そう だったんですか」

「すみません…。なにも言わずに」

「あつ！ いえ、その私が勝手に探していただけなので」

「？」

その時、左側の通路から亜紗葉が萩たちの姿を見つけ、駆け寄ってきた。

「萩様、蒼全様」

その言葉に

「蒼全 でいい」

指摘する蒼全。

「あつ、いえ…では、萩様、蒼全さん。お帰りなさいませ」

「えっ！ あの、その今、戻りました」

「同じく」

萩と蒼全は少しかしこまった様子だった。

亜紗葉はチラッと蒼全を見た。

亜紗葉の様子を見て、律は八つとした様子を見せ、

「萩さん」

「？はい」

「おっ、お疲れ様です!!」

「！ありがとうございます。律さん」

萩は一瞬、驚いたようだが、微笑んだ。
すると、律は赤面した。

萩たちから離れたところで、その様子をつかがっていた東雲が

「もしかして 律ちゃんや亜紗葉ちゃんて

」

…それから、萩たちとの話が終え、亜紗葉と律が部屋に戻ろうとした時

「亜紗葉ちゃん、律ちゃん」

二人を呼ぶ声がし、振り返ると、通路の柱から手招くのが見えた。

「…？」

二人は不思議に思い、その手招く方へと近づいていった。
そこには東雲の姿が。

「東雲さん！」

「東雲サン！！」

驚く二人。

「どうしたんですか？東雲サン」

律が尋ねる。

「いや、その実はね、二人に聞きたい事があって」

「なんですか？」

不思議そうにしている亜紗葉。

「率直に聞くかもしれないけど…二人は気になる人と好きな人がいるでしょ？」

「！？」

「なっ！！！」

亜紗葉と律は口を開き、驚く。

二人の様子を見た東雲は確信した面持ちで

「亜紗葉ちゃんは、蒼全の事が完全に好き というのではなく、少し気になるぐらいで、あまり表情にはださなない感じ。…で、律ちゃんも確実に萩くんの事が好きで、凄く表情に出やすい感じ…かな」

東雲は口元が緩みに緩んだ様子で、ちらっと隣にいる二人を見た。

「……」

隣では東雲の言葉に全てを見透かされたように、ぽかんとした様子の亜紗葉と律がいた。

「んふふふ」

東雲はにこつと笑いかけた。

「もし、律ちゃんと亜紗葉ちゃんが二人に気持ちを伝えたりなんなりするなら、

早めに言っていたほうがいいよ」

「えっ……」

律が声をもらした。

「たぶん、明日にはここを立つだろうからね」

東雲が亜紗葉たちから少し目を逸らし、遠い眼差しで話す。

「そうなんですか？」

訝しげに亜紗葉が尋ねる。

「たぶんね。だから、伝えたかったら今のうち行っておいで」

「……」

二人は黙り込んだ。

「さあ〜て、私は部屋に戻ろうかね」

一言いうと、東雲は部屋へと戻っていった。

東雲が戻ると、部屋では時雨がすぐにも部屋を出るといった様子で荷物をまとめていた。

「どうしたの、時雨ちゃん」

「あっ！東雲さん！！」

「なにかあったの？」

「はい。実は 優利様から、お呼びがかかりまして」

「えっ 優利様から…てことは、少しばかり手こずってるって事？」

「おそらく」

「優利様たちのところにも厄介な冥鬼が…」

「ですので、私はここで」

時雨が荷物を持つとした時

「待って、時雨ちゃん。冥鬼とやっている時、荷物邪魔になるから私が後から届けておくよ」

「いえ、しかし」

時雨は東雲の真剣な眼差しを見た。

「 わかりました。では お願いいたします」

時雨は、一言 礼を言つとスツ と姿を消した。

部屋で一人残つた東雲は心配そうに小さく呟いた。

「 萩くんたち、今回は大丈夫かな…」

部屋に戻ってきていた萩と蒼全は休んでいた。

「いよいよ今夜だね」

「そうだな」

「夜までには少し時間ができたみたいだね」

空を眺める萩。

「ああ。日が完全に沈むには二時間ばかりあるな」

…その時

「萩くん、蒼全。入ってもいいかな？」

ふいに、入り口の襖の向こうから東雲の声がした。

「あつ！ 東雲？ うん、いいよ」

萩の声と共に、東雲が入ってきた。

「二人とも、何してたの？」

「ん？ 夜まで少しあるなーって、蒼全と話してたところなんだ」

「ふーん。そうなんだ。じゃあさ、今から体を休めにいかない？」

「えっ…？休めって…」

「温泉だよ、温泉」

「お、温泉」

なぜか少し驚いた様子の萩。

「また唐突だな。東雲」

蒼全もまた、驚いた様子。

「だって、せっかく旅館に来たんだから、露天風呂ぐらい入らなきゃ！」

それに、萩くんや蒼全だって今日一日、歩き回ったんだから汚れを落として、

疲れもとらないと、仕事になんないよ」

その言葉に、萩と蒼全は

…クスッ

「 まあ、そうかもね」

「 だな。この後も、仕事が残ってるしな」

二人は笑いをこぼしつつ言った。

「 そうと決まれば早く準備する！ じゃあ、私はここいらで退散
しますか」

東雲は部屋を後にした。

少しばかり時間が過ぎ…

ガラツ…

「わゝ、露天風呂だ」

男性陣二人は露天風呂に来ていた。

「けっこう広いな」

蒼全が周りを見渡す。

「僕たちだけみたいだね」

チャプン…

二人は湯に浸かった。

「気持ちいいな」

「ああ。あまり、こういった機会はないからな」

…とその時

ガラッ…

「おお〜 広おーい！！」

隣の女湯から、東雲の声が聞こえた。
次に亜紗葉と律の声がした。

「喜んでいただけで光栄です」

「やっぱ、亜紗葉の所の露天風呂は他のと違うね」

「あ、東雲たちが来たんだ」

隣の男湯では、萩たちが東雲たちの声を気付いていた。

「萩くん、蒼ぜん。居る？」

東雲の声が男湯に向けて向けられる。

「んー。いるよおー」

萩の声がかえってきた。

「えっ！！萩さんが！？」

「蒼全さんが！？」

律と亜紗葉、二人驚く。

「あの二人の声だな」

蒼全が呟いた。

「そつちの湯加減どーですか」

「うん。気持ちいよー、…ね？蒼全」

「ああ」

「…だつてさ」

東雲は亜紗葉の方を向き、悪戯笑みを浮かべた。
亜紗葉は嬉しそうに微笑む。

「じゃあさ、萩くんたち…」

「……？」

萩と蒼全は東雲の声に耳を傾けた。

「私たちが、お背中流しにそっちに来ようか？」

「へっ…?!」

「ん なっ…?!?!」

東雲からの突然の予期せぬ言葉に二人は度胆を抜かれたような声を上げた。

「あはははは。嘘に決まってるじゃ〜ん」

東雲が笑いながら言ってきた

「……」

「もしかして期待してた？」

「!!!」

「違うよ 東雲！なに言ってるのさ!」

「あははははは」

女湯では、東雲の笑い声と律と亜紗葉の少笑いの声が響いた。

…その後

衣を着て、数珠を首から下げ

「よし」

そこには、シキジンフク式陣衣を身に纏った萩の姿があった。

シキジンフク式陣衣とは式神師の仕事着のことだ。

「準備出来たな」

壁にもたれ、座った状態の蒼全がこちらを見ている。

「 蒼全。そろそろ行くところか」
「 ああ」

萩たちは廊下へと出た。

…その頃

「 はあゝ、気持ち良かったー」

律が一人、廊下を歩いていた。

「 ……そういえば、亜紗葉。今日は一人、部屋に戻っていったけど……どうしたのかな？
具合でも悪くなったのかな」

考え事をしていると、律の右のほうの庭を一人、南側に歩いていく

人影を見た。

「…………ん？」

律が目を凝らしてその人影を見ると、亜紗葉の後ろ姿だった。

「…………亜紗葉？ 亜紗葉ー！」

亜紗葉だと認識した律が外にいる亜紗葉に呼びかけた。

「亜紗葉ー、なにやってんのー？」

「…………」

律の呼びかけに返事がない。

「…………？ 亜紗葉ー！ 亜紗葉ったらあー！」

「…………」

「あれ…………？おかしいな…………」

すると

「 どうしたんです？ 律さん 」

律のいる西側と向かい合う東の廊下から萩と蒼全がやってきた。

「 あ、萩さん。 さっきから庭にいる亜紗葉に呼びかけてるんですが…
様子がおかしいってどうか… 応じてくれなくて… 」

「 ……？ 」

萩たちが庭にいる亜紗葉を見ると亜紗葉は、一直線に南へ向かってゆっくりと歩いていっていた。

「 南…？ あっちの方角は… 」

「 神楽山の方だ 」

「 ……！！ まずいつ！ 亜紗葉さんっ！！ 」

萩と蒼全はすぐにその場を離れ、亜紗葉を追っていった。

すると、亜紗葉の歩く速さが増し、萩たちと距離が開いてきた。

「 速さが増した！！ 」

「 亜紗葉が次の標的だったか 」

二人は全速力で亜紗葉を追った。

ザッザッザッザッ…

萩たちの走る足音が夜の森に響いていた。

「くそっ…、見失ったか…」

ハア…ハア…ハア…ハア…

蒼全は息を切らしながら言った。

「でも、まだそんな遠くに行っていないはずだ。探してみよう」

萩も疲れた様子だった。

二人が亜紗葉を探していると、夜空の雲の隙間から月明かりが萩た

ちの足元を照らしてきた。

「満月…」

「こんな夜に満月なんてね…」

萩が月を見ていると

「萩！」

突然、蒼全の声がし、萩は蒼全の方を見た。

すると、萩と蒼全の足元に二人と別の足跡が残っており、前方に進んでいた。

「これはもしかして…！」

「ああ。もしかしたら、亜紗葉の足跡かもしれない」

「追ってみよう…！」

二人は足跡を追った。

ザッザッザッザッ…

少し進むと

「…」

萩が何かに気付いたのか、立ち止まった。

「どうした」

「ちよつと待って」

萩が月の隠れた真つ暗な道の途中、遠く離れた前方にぼんやりと、二つの人影らしきものを見つけた。

そこは昼間、萩と蒼全が黒天狗と共に立ち寄った大きな岩の所だった。

「あれ」

「？」

萩の指差す方を蒼全も暗闇に慣れてきた眼で見つめた。するとやはり、前方の岩の前でぼんやりと人影を見つけた。

「あれは…」

「たぶん、亜紗葉さんだよ」

「じゃあ、もう一つは…！」

「すべての発端の元だろうね…」

「なら、今すぐにも…」

蒼全が駆け出そうとした時

「待って、蒼全。…少し様子を見よう」

萩と蒼全は草むらの中に身を隠し、ゆっくりと人影に近づいていった。

二つの人影のうち、一つが岩に近づき、何かをしているようだ。すると、岩が大きな音を立てて、左側に動き、中には真っ暗闇が広がっていた。
洞窟のようだ。

「 ! 岩が動いた」

「 …やはり、あの洞窟だったんだ」

「 じゃあ、中に皆…」

「 ほぼ、そうだね。…後、死んでないとすると皆、衰弱してると思う。」

岩を塞がれる前に行こう、蒼全

「 ああ」

その時、夜空では月を覆っていた雲が完全に無くなり、月明かりが二つの人影をすこしづつ、照らしていった。

人影のうち、一つは亜紗葉で、もう一つは…

萩はその姿を見た瞬間、勢いよく、その場の草むらから立ち上がり、思わず声を出してしまった。

「 …君は 昼間の…」

萩の行動に蒼全は慌てた。

「 つ、萩！」

月明かりに照らされ、現れたのは昼間、萩たちと行動を共にした黒天狗の姿だった。

萩の言葉で、こちらの存在に気付いたのか、黒天狗が萩たちの方をゆっくりと見た。

「おや…。今日は鼠一匹…いや、二匹付いてきたか」

萩の後ろで蒼全が立っていた。

「どうして君が…」

萩が恐る恐る尋ねた。

「もしや、貴様の言う身体はこの器の事か？」

「器…？」

「そうだ。この器だ」

「…昼間と様子が違う」

蒼全が真剣な眼差しで黒天狗を睨む。

黒天狗は、萩の身なりに目を通し

「その身なり…。式神師か。」

ならば、後ろの奴は式神といったところか。先程は、完全に気配を

隠していたようだが」

「…ああ。そうだ」

蒼全は言葉と共に、式神としての本来の姿となった。

「君は、昼間の黒天狗と違う よね…」

尋ねる。

「そうだ。我は名もなき神。この身体は我の器だ」

「この者（黒天狗）に乗り移ったか…」

「肉体のない我にとって丁度良い器だったんでな。それにこの身体とは呼び合ったようなものだ」

「呼び合った？…それはどういう意味だ」

「ふんっ…これ以上の事は貴様らには関係のない事。知る必要はない」

黒天狗は後ろを振り返り、亜紗葉を洞窟の中へと入れた。

「亜紗葉さん！」

萩の言葉に亜紗葉はぼーっとした眼差しで振り返った。

自ら意識がないように見える。

どうやら、操られている様子だ。

「……」

「貴様の声などで、我が術が解けるわけなからっ」

亜紗葉はまた、後ろを振り返り、洞窟の中へと進んでいった。

「 亜紗葉っ！！」

蒼全が、亜紗葉のもとにかけようとした時

ビリッ！！！

「 なっ！？」

蒼全がなにか得体の知れないものに触れた。結界のようだ。

「 村の子らは、貴様らには渡さん…！」

黒天狗が薄ら笑みを浮かべながら岩に触れようとした瞬間

シャラン…

ビリッ

「っ！」

黒天狗はバツと後ろを振り返った。
背後では、萩が数珠を手に巻き、札を片手に持った状態でいた。

「貴様ア」

「塞がれては困るので」

「式神師ごときが結界など張りおって…私の邪魔をするというのか！！」

「あいにく、あなたの目的を阻止することが僕たちの仕事の目的のようなので…邪魔させていただきます」

「おのれエ…！」

黒天狗が萩に襲い掛かってきた。

「萩！」

萩は、右手首を軽く上下に振った。

すると、シュツと槍が現れ

カキン、カキーン…

萩は黒天狗のかまいたちを槍でなぎ払った。

「チツ…！、こしやくなア…！」

黒天狗が萩と距離をとったとき、背後から水龍が大きな口を開け、襲ってきた。

「何ッ…！？」

黒天狗は危機一髪という所で蒼全の攻撃を避けた。

「貴様らのような者が神に葉向かう刃向かうとは…いいと思っ
ているのか！」

黒天狗は怒り狂った顔で萩と蒼全に怒号を上げる。

その言葉に萩は力強く、

「神であろうと一度、自らの欲望に堕ちたものはもう『神』では
ない。…『冥鬼』だ」

「自ら力を、肉体を欲する事の何が悪い！多少の犠牲は必要だ」

「あなたは罪を犯しすぎた。人間を…冥鬼を…。その時点で神の

する事ではない」

「黙れっ！人間風情が！！我が邪魔はさせん。消し去ってくれる
！！！」

その瞬間、黒天狗は一気に力を溜め始めた。

ビリッ　ビリッ…

「！？」

萩と蒼全は身にふりそそぐ力の強さを感じていた。

「なんだ…この力は…」

蒼全の表情が、一気に険しくなった。

「さつきと桁外れに違う　そして、この感じ…もしかして、器と
なっている黒天狗の力と中の冥鬼の力が一つになっているのか!？」

「何っ!」

「黒天狗自身の力が元から強い…。それに神の力が加われば…マ

ズイツ！！

力の増幅を押さえないと今の僕たちじゃ、太刀打ち出来ない！」

「…くそっ」

萩と蒼全は互いに黒天狗に攻撃を仕掛けた。

「たあアアアア！！！」

蒼全は氷柱を立て、六匹の水龍を黒天狗に向けて勢い良く放った。氷柱は崩れ、水龍は見事、黒天狗に命中した。

「…」

しかし、次の瞬間

「…貴様らの力はそのようなものか」

蒼全の力をまともにくらつたにも関わらず、衣一つ切れていない無傷のまま、黒天狗がその場に立っていた。

「…なんだと…っ！？」

蒼全は驚きあまつた表情をした。

反対のほうでは、萩が言霊を唱えようとした時

「…少しの間、貴様らの相手は我ではない」

そついうと、黒天狗は右手を左前に突き出し、右へと動かしながら

「主たる声を聞け。我が下^{モト}に目覚めし集え」

言霊を唱え終えた瞬間、墓石の下から沢山の冥鬼の死骸がミイラの如く現れてきた。

ボコツ…ボコツ…

「!?!」

萩と蒼全の周りでも、冥鬼たちの死骸が墓石の下から、手など出てきた。

骨だけのものや、中にはまだ腐敗しきれてなく、血肉の付いたものもいた。

一瞬にして、その場は死骸の血なま臭さで覆われた。

「うッ…」

萩たちは衣で鼻元を覆った。

むっとした空気の中、死骸の冥鬼たちが萩と蒼全に襲い掛かっていた。

「蒼全…っ、この冥鬼たちって…」

ザッ…ザッ

萩は槍で斬り清め、

「たぶん、あいつ（黒天狗）に食われた冥鬼どもだろっ」

ギヤア ギヤア…！

蒼全は水龍を冥鬼たちの中に放った。

萩の長槍は、言霊の力が元から宿っているため、斬っても清めることができる。

蒼全の攻撃も、式神の力で清めることができる。

「数が多すぎて、このままじゃちがあかないよー！」

萩は思った。

（ 食い殺した後も、自らの欲望のために支配するなんて…絶対に許さない ）

ザッ ザッザッ…

「 だな ！！ 」

ギヤア グウえ、グアアア…ッ

…その時、萩は冥鬼たちに囲まれ

「 ……！？」

ザッ、ザッ…！

なぎ払った。しかし

ガシッ…

「なッ…」

萩は足元に目をやった。

するとそこは、冥鬼の墓石の所で萩の足を冥鬼がしっかりと掴んでいた。

その瞬間、片足の動きを奪われた萩の背後を、冥鬼が鋭い爪で引き裂いた。

「っあア、アッ！！！」

ビチビチッ…！

萩の叫び声が響き、辺りには血が飛び散った。

「 萩いいイ ツ!!!!!!!!!!!!!!」

蒼全は萩の名を叫び、

「 くそツ……!」

冥鬼たちをなぎ払いながら萩のもとへと駆け寄った。

「 萩っ……大丈夫かッ!？」

すると、萩はうつすらと目を開き

「 ギリギリ……ッ なんとかね。

裂かれる前に、一瞬だけど、薄い結界を張ったから少しはマシ……」

うつすらと笑みを浮かべる。

「 立てるか?」

「 うん……大丈夫。……でも、早くしないと……!」

萩は立ち上がった。

(この状態だと戦力不足だ……。東雲を呼ぶしかない)

萩はそう思うと、心の中で叫んだ。

（ 東雲ええ

ツ！！！！！！！！）

旅館の方では…

（ 東雲ええ

ツ！！！！！！！！）

「 ！？！ 」

東雲の脳裏に萩の東雲を呼ぶ声が響いた。

「 この声…萩くん！？ 」

その瞬間、東雲はスツ…と姿を消した。

神楽山の方では萩たちが冥鬼たちに苦戦していた。
すると

「萩くん！蒼全ツっ！！」

東雲が式神としての本来の姿で現れた。

「東雲ッ！！」

萩が喜びの表情で出迎えた。

「助かる！東雲」

蒼全も萩と同じ表情で出迎えた。

「うっ 何この臭い…それに、こんなに沢山の冥鬼！」

東雲も衣で鼻元を押さえた。

「東雲、この冥鬼たちの数を減らして！」

「…了解」

東雲は冥鬼たちの群れに稲妻を落とした。

バリバリバリバリ…ッ

スッ…スウツ…

冥鬼たちは東雲の稲妻を受け、次々と姿を消していった。

だいぶ時間が経った頃…

蒼全が辺りの冥鬼を祓い終わっていた。
それに気付いた萩は

「蒼全っ！こっちは僕たちが引き受けるから、彼を早く！」
「だが、そっちにはまだ冥鬼が」
「僕たちの事は大丈夫だから…早くッ」

蒼全は少し戸惑いながらも萩の言葉に頷き、黒天狗の元へと駆けていった。

「！」

黒天狗は蒼全にかまいたちを放った。だが、すべてを避けられてしまった。

（何ッ、さっきより速さが増しただと！？）

蒼全は黒天狗との接近戦にもっていき、水の刃を彼の左腕に突き立てたが、

「…っ！！！」

浅い傷を負わせただけで、次の攻撃をしようとした瞬間
黒天狗の顔が一変し、もとの黒天狗の顔となり

「助けて…！」

「！？」

助けを求める黒天狗の表情に蒼全の動きが一瞬止まった。その一瞬を黒天狗は見逃さなかった。

黒天狗の顔はまた、冥鬼の『器』としての顔に戻り、黒天狗の風を纏った左手が蒼全の腹部を貫通した。

「…グァッ…ッ…！」

ビチビチビチビチ…ッ!!

「蒼ぜエ

ッ!!……!!……!!……!!」

腹部を貫通した蒼全の背後からは生々しくも、鮮血のついた黒天狗の
手が見えており、
辺りには血が飛び散っていた。
そして、黒天狗は貫通したままの蒼全の身体を無造作にも、近くの
木へと投げ捨てた。

蒼全は木に身体を強く打ち付け、そのまま、ズルズルと地へと落ちて
いった。

「……」

言葉を発しない蒼全に萩が近づこうとしたが、行く手を冥鬼たちに塞がれてしまった。

「蒼全ッ！！蒼全ッ！！！」

「……………」

萩が必死で呼び掛けたが、返事がない。

「蒼全ッ…！」

東雲が、真っ青な顔で言葉を発した。

「ふんっ…、不様だな。一瞬、我がこやつワレの意識を使ったのが、貴様の運の尽きだったな。

同情などかけおって」

黒天狗は鮮血のついた左手を払いながら言った。

「……………」

萩は自分の周りと東雲の周りに広い範囲の結界を張った。

「萩くん？」

「東雲っ！結界で冥鬼たちの動きを防ぐから蒼全の所に！この数だとあまり長くは防げない…！」

とその時、東雲は萩の後ろ姿を見て一瞬、言葉を失った。

「…！萩くんっ！！その 後ろの怪我…っ」

萩の背中からは先程、冥鬼からの攻撃で傷口からは少し血が流れ出ていた。

「僕は蒼全までは酷くない。大丈夫だから、早く蒼全を…っ」

「…！！」

萩の強い意志に東雲は

「…わかったよ、萩くん。でも、あまり無理をしないでね。後で応急処置するから」

そう言うと、東雲は蒼全の元へと駆け寄っていった。

ビリッ…

ビリビリッ …

「…っ！」

萩の結界にヒビが生じてきた。

（このままじゃ この結界も保たない…っ！でも、どうにかして東雲の、蒼全への応急処置まで保たせないと…）

く消えゆく子供 現代の神隠し 一刻*****

木の傍らでは、東雲が蒼全に応急処置の結界を張っていた。
傷口からは今もドクドクと血が流れ出ていた。

ビリビリ...

パリンッ...!!

「くっ...」

萩の結界が壊れ、中に閉じ込められていた冥鬼が次々に結界の外へと出てきた。

ザッ…

萩は地を激しく蹴り、素早い動きで冥鬼たちの中へと駆けていった。

ザッ…ザザッ、ザッ　　ザッ…！

萩は辺りの冥鬼を先程より数多く斬り抜けていった。

…ザッ、ザッザッ…

ハア…ハア…ハア…ハア…

息を荒げながら、数少なくなった冥鬼を斬り抜けて少し経った時

「　　ああ…ッ！！」

東雲の声がし、振り向いて見ると二人の周りを冥鬼たちが囲っていた。

東雲は結界を張っている間、攻撃ができない。

萩は急いで、二人の元へと駆けていき、そして、結界を張った。

ハア ハア

「大丈夫？…萩くん」

「うん。なんとか…。それより、蒼全の様態は」

「大分落ち着いたよ。…でも、まだ意識が戻ってないの」

「…どちらにしろ、これ以上、長期戦にさせる訳にはいかない。

そろそろ、かたをつけないと…」

「どうするの、萩くん」

「僕が黒天狗から、中身の冥鬼を引き離す」

「引き離すって無理だよ！そんなこと。」

私も最初っから、この場にいたわけじゃないけど…私にだって今、黒天狗と中の冥鬼が完全に統合し合っているのがわかる。そんな状況で助かるはずが…」

「でも、僕は助ける。…彼は 黒天狗は、自分が知らない間に身体を乗っ取られてて、仲間を殺して…それに気付かず、敵討ちをしたって…。」

そんな中、何も知らずに被われるなんて…。彼は（黒天狗は）生きたいはずだ。

誰だって、命がある限り最後まで生きたいのがあたり前じゃないか…。

…だから、僕はなにがなんでも、彼を助けだす…！」

そういうと 萩は結界内に札を張り、外へと出た。

一瞬、萩は衣の袂になにかを入れた。

「 萩くん… 」

東雲が不安でいっぱいの表情で萩を見上げた。

萩は東雲に優しく微笑み、

「 僕は大丈夫 。それに、今度はそうたやすく冥鬼は近づけないから 」

その直後、萩は黒天狗のもとへと向かった。

萩がその場を離れた後、残りの冥鬼が東雲たちの方に近寄ってきた。だが、次の瞬間、結界に触れた冥鬼たちが次々に清められていった。

スウ…、スウ…

「 完全なる肉体に近づいてきた…。力が…力がみなぎってくる…！
もう、我に楯突く奴はいなくなる… 」

黒天狗が興奮した様子で叫んでいた。

（ マズい…!!!! ）

萩は焦りの表情をし、首から下げている数珠で言霊を唱え、動きを封じようとした。

「 今こそ、我が肉体は… 」

その時

黒天狗の動きが止まった。

「 …なに…ツ!?! 」

「 ! 」

萩は言霊を唱えるのを止めた。

見ると、黒天狗の身体を風の結界がジリジリと縛りあげていた。
すると

「 血の臭いを追ってきてみれば…、手こずってるようだな。緋ノ
原家当主。 」

「 !?! 」

突然、青年の声が萩の後ろの辺りから聞こえた。

萩はこの声に聞き覚えがあり、声のする方へと振り返った。

少し離れた高木の上に灰色の髪に白の衣…

阿柰狗羅ノ神の姿があった。

「阿柰狗羅ノ神…！」

萩は驚きあまつた声を上げた。

「緋ノ原家当主、俺が動きを封じている間に早く！」

「はいっ！」

萩は黒天狗の方へ真つ正面から向かった。

…そして、直前で風の結界が消えた。

「…！！！」

黒天狗が真上を見ると

そこには地を蹴り、月を背後に、一瞬、宙に浮いた萩の姿があった。

次の瞬間

萩は袂からなにかを取り出した。

それは先ほど、萩が袂に隠した四つ折りにされた紙…。

札を黒天狗の口に入れ、飲み込ませるかのように上から、口元を手で押さえ言霊を唱えた。

萩は数珠を握り、冥鬼の周りに結界を張り、動きを捕えた。肉体を無くした冥鬼は萩の力でも押さえる事が出来た。

そして構え、札を取り出し、言霊を唱えた。

「恨みし想いは清き想いとなり、清き心は穢れを祓いし時。汝、ナンジ安らかに眠れ…」

すると

冥鬼はスウ　と消えていった。同時に他の操られていた冥鬼たちも姿を消した。

「もとが消えれば、他の冥鬼たちも消える…か」

萩は空に向かって、手に数珠をかけ、手を合わせた。

…それから、あの岩の洞窟からは神隠しにあっていた村の子どもた

ちが

少し衰弱した様子で見つめた。

すぐに、東雲による手当てが行われた。

少し経って、蒼全も意識を取り戻した。

萩は蒼全の居る近くに、黒天狗を運び、寝かせていた。
阿柰狗羅ノ神も降りてきた。

…東雲の手当てが一通り済んだ後

「ん…んん…」

黒天狗が目を覚ました。

最初に見た光景が、萩と阿柰狗羅ノ神の安堵の表情だった。

「よかったー…意識を取り戻したんだね」

「…ここは…」

黒天狗が薄ら開けた瞳で尋ねてきた。

「おまえの山だ」

阿耨狗羅ノ神が一言答えた。

…その後、萩は黒天狗に神に身体を乗っ取られていた事…、
自分が仲間を喰い殺した事…、すべてを隠さずに話した。

「そ、そんな… 自分自身が…仲間を…くっ 喰い殺し
…て…」

黒天狗は瞳から大粒の涙を流し、動揺した面持ちでいた。

「君には知りたくない真実だろうけれど…、すべてを話させて
もらったよ」

萩が重々しい様子で言った。

「…いえ。自分に意識がなかったとはいえ、
この身体で罪を犯した事には変わりようのないこと…」

黒天狗は遠くを見つめるような遠い目で言った。

「一つ聞きたいことがあるんだけど…、君はいつ、あの冥鬼と
出会ったか覚えているかな」

「はい。…その時の事ならば覚えています。 ある時」

かーごめ かごめ

かーこのなーかのとーりいーはー

いーついーつ、出 やあるー

夜明けのばーんに

つーると かーめがすーべったー

後ろの正面 だーあれー

村の子どもたちが、ここ（神楽山）で遊んでいました。

姿が見えずとも、自分は子どもたちが遊んでいる姿を見るのが好きでした。

…その中でも、円の真ん中で座っていた女の子の姿をなぜか見ていました。その女の子は冥魂を持ち、他にも子どもたちの中には持つ

ている子がいました。

自分は「神楽村の子どもは冥魂を持っている子が多いな」と思っていました。

次の日、円の真ん中にいた女の子が一人、山に来ていました。

私は気になって、離れた距離からですが見ていました。

女の子は低い木の、山の実を取ろうと慣れない手つきで木に登っていったのです。

しかし途中、女の子は足を踏み外し、地へと落ちていく時に足を擦り切ってしまう、そこからは血がでていました。

女の子はその場で泣き崩れてしまい、自分はずぐ、仲間の冥鬼から以前、もらって手に巻いていた

白い布を彼女の近くに置いていきました。

すると、女の子は泣き止み、驚いた様子で自分を見ていました。

そして

「あなた……誰……？」

女の子が話しかけてきたのです。

「……えっ……」

自分は驚き、少しの間、彼女と見つめ合っていました。

少し経って、私は彼女の傷口に布を巻きながら

「自分が…見えるんですか？」

と尋ねると

「うん」

自分はその時、彼女がなぜ自分の姿を見る事が出来るのかわかりませんでした。

しかし、初めて見る自分の姿に嫌がりもせず、羽に触れてきたのです。

「！！」

「あなたの羽…。ふわふわしてて柔らかい…」

彼女は微笑んでました。

…日が傾き始めた頃

「ありがとう。鴉さん」

「えっと、自分は鴉じゃなく、黒天狗なんです」

「？ 鴉さんじゃないんだ。…じゃあ、さようなら。黒天狗さん」

彼女は笑みを向け、後ろを振り返った。

自分は帰ろうとする彼女に声をかけました。

「あのおっ その…、自分が怖くないんですか？人間じゃない、自分を…」

すると彼女は、

「だって、怪我した私を助けてくれたんだもん。正直、最初は

驚いたけど、

黒天狗さんは『優しい物ノ怪さん』だよ」

そういうと、彼女は村へと帰っていきました。

自分は、まだ十歳ぐらいの彼女と…人間とその時、初めて話を交わしました。

それから、次の日もまた次の日も彼女は自分に会いに来てくれまし

た。
話しているうちに自分たちは互いにいろいろな事を話しました。

ここから先、一部は黒天狗の記憶にはない部分です。

…ある夜

「よ。おいで」

「？ なあに？おばあちゃん」

「よ。おまえ、毎日神楽山の方へ行っているそっだね」

「うん。行ってるよ」

「山でなにをしている？」

「黒天狗さんとお話してるんだよ」

「、明日からは山へ行っではいけないよ」

「どうして、おばあちゃん」

「あの山は昔から、物ノ怪がうじゃうじゃいるって言うんだよ。

普通の人間には見えないようだが、
よ。おまえは、なにか
しら物ノ怪が見えるようだからね。

物ノ怪と知り合っではいけないんだよ」

「どうして？だって、黒天狗さんは怪我した私を助けてくれたん

だよ？…なのに」

「…『仇』だからだよ」

「…仇？」

「そう。おまえの父親の」

「え…？父さんは獣に殺され…」

「それは表向きだよ。村の皆には知らせていない。本当は物ノ怪に殺されたんだ」

「そんな…」

「まだ幼いおまえには早いと思って言うのをためらっていたんだが…、

もう話してもいい頃合いだろうね…」

…話を聞き終えた少女の瞳からは、大粒の涙が頬を伝い、心は黒い憎しみに満ちていった…

…次の日

自分はいつものように、木の上で名も知らぬ彼女の来るのを待っていました。

その時の自分は、彼女と会うことがなによりの楽しみでした。

あいかかわらず、自分以外の仲間の冥鬼は人間が来るたびに姿を隠していました。

自分は皆に、

「人間は あの子はとても優しい子だよ。なんで皆、人間を嫌がるの？」

と言つと

「黒天狗…、おまえは本当の人間の姿を知らない。

人間と冥鬼は姿を見合わせてはいけないんだ。今に、わかる時期が来るかもしれないな…」

他の冥鬼たちは、普段はいつものように自分と接してくれていますが、

彼女と会う時だけは皆、違いました。

自分は仲間の意見を無視し、彼女に会いにいったのです。

…少し経って

向こうから、彼女がやってきました。自分はすぐに彼女の元に飛び立とうとしました。

見ると、その日に限って、彼女は他の人間の子らを連れてき、そして、

その中で一人、重々しい空気に包まれていたのです。

私はその場を動かず、彼女が近づいてくるのを待っていました。すると、彼女はいつものように自分を呼びました。

「黒天狗さん……」

ガサツ

私は木の葉の影から姿を現しました。

「木の葉が動いた！」

一人の子どもが驚いた様子でした。

「物ノ怪だ……！」

「あそこに居んのか」

「何処だよ。俺には見えないよ」

子どもたちが 言い合つ中、彼女は自分に指を差しながら

「あそこ」

「あいつだ！俺には見える……！」

自分はその時、二つの事を知りました。

一つめは、子どもたちの中で冥鬼が見える子が冥魂を持っているという事。

…二つめは、自分を憎悪の眼差しで見つめる彼女の姿。

自分はその時、心の中で得体の知れないなにかが冷たい感じを残し、重々しく過ぎ去っていくのを感じました。

「……っ!!!!」

私は彼女に話し掛けようと思いました。
その時

「物ノ怪なんて、大ッ嫌い!!!!!!」

彼女は憎しみのこもった声で叫びました。

「!?!」

自分は言葉を失いました。

「おまえらなんか、ここから出ていけっ!!いなくなっちゃえ!!」

大粒の涙を流しながら、彼女はそこいらの石を自分に投げてきました。
た。

「あそこにいるんだな?皆、投げろ!」

他の子らも、自分めがけて石を投げてきました。
自分は羽で身体を庇おうとしましたが、何個もの石が羽に…身体に当たりました。

「　　っ、痛ッ、痛い！」

ガッ　　！！

痛みを感じ、額の左側に手をやると血が流れ出ていました。

…子どもたちが去って

自分は、血が流れ出ている傷口を押さえながら一人、泣いていました。

自分はその時、なぜいきなり彼女が石を投げてきたのか分かりませんでした。

その後

仲間の冥鬼が声をかけてくれましたが、自分は一人にしてほしいと言いました。

泣きながら、自分は

（人間とは、なんて薄情で簡単になにもかもを裏切る生き物なんだ）

…人間なんて…人間なんて）

…自分はそれから、人間と接する事を頑固とし拒絶しました。

…二、三日経ったある夜。

自分は未だ、彼女との悲しさを心に残しながら一人、月を見ていました。
すると

「おまえ、我と似た所があるな…」

突然、どこからか声が聞こえてきたのです。

「えっ…」

「…その憎悪の籠もった感情　その気持ちを我が晴らしてやるとしたら　おまえはどうする…？」

「この気持ちを 楽に」
「そうだ…」

「人間との あの日々を…！ どうしたら晴らしてくれる…？」
「ふふっ…。 まずは、おまえの体を我に授けよ」

自分はその言葉に…誘いに頷きました。
すると、突然と微かな光が現れ、自分の身体にスウ っと入ってきたのです。

それからというもの、自分は夜の間の記憶がありませんでした…。

く消えゆく子供 現代の神隠し 二刻*****

「……」

萩たちは黙って話を聞いていた。

「人間に裏切られた思い…か。それが邪心の心を持った冥鬼に目をつけられたのか…」

萩が目線を下向きにしながら悲しい面持ちで言う。

「！でも、君は僕たちと会った時は 普通…だったよね？」

「…あの時は、本当に驚きました。しかし、少し前に仲間から、

邪に犯された冥鬼を助けてくれる『式神師』がいると聞いておりまして、貴方がたが式神師の方だと分かりました。式神師の方ならば信じれる、冥鬼の味方だと思ひまして。

村の人はこんな山奥まで足を踏み入れることがあまりないので

「…ああ、それで」

納得した様子の萩。

「…しかし、自分はそんな大事な仲間を皆 皆…」

黒天狗は再び、辛い現実に戻り、涙を流した。

…すると

「黒天狗。その なんだ…。俺の山に来ないか？

…ここは、今のおまえがいるには辛すぎる場所だ。だからといって逃げる時までには言わない。

…だが、もう二度と同じ事が繰り返されないために、一緒に神楽村を…この山を守っていく事…それがおまえに出来る罪滅ぼしにはならないか？」

阿耨狗羅ノ神は萩たちの話を聞き考えた末の結果だった。

「…!!」

黒天狗は驚いたまま、なにも発せずじまつた。

「…いや、その」

阿耨狗羅ノ神が少し慌てた様子でいた。

すると

「…すみません。阿耨狗羅ノ神のような高い位の神様からそのようなお言葉をかけていただけるとは、思ってもいませんでしたので
つい」

その言葉に阿耨狗羅ノ神はふつと笑いかけ

「じゃあ、決まりだな。…そういえば、まだおまえの名を聞いて
いなかったな。名は？」

阿耨狗羅ノ神が尋ねてきた。

その言葉に黒天狗は

「自分のような冥鬼には名は元々からありません」

「なに？名がないのか。それでは言いにくい。…ならば、俺が
つけよう。」

『何事にも挫けず、弱音をはかない強い、堅い意志を持つように』

翡翠。ヒスイ

翡翠はどうだ？」

「翡翠…」

その瞬間、また、黒天狗の瞳から大粒の涙が溢れ出てきた。

…そして

「あつ……ありがとうござい……ま」

黒天狗は泣きながら喜んでしていると突然、力なくその場に倒れようとした。

それを、阿柰狗羅ノ神が身体を支えた。

「おっと」

「！翡翠」

萩が驚き、声をかける。

「…大丈夫だ。急に緊張がほぐれて、意識を保てなかったんだろ
う」

翡翠は阿柰狗羅ノ神に支えられ、眠っていた。

すると、阿柰狗羅ノ神は翡翠を軽がると持ち上げ、姫サマ抱っこした。

「じゃあ、俺は翡翠を俺の山へ連れて帰る。あ、あと緋ノ原家当主。」

前よりか成長したようだが、あの位の冥鬼にやられそうになるとは……まだまだだな。

そして、蒼全。昼間知り合った冥鬼だろうと、一瞬の油断が命取りになるぞ。

今度また同じ事があった時は……命がないと思え。いいな？」

「……」

蒼全は阿柰狗羅ノ神の言葉にただ、黙る事しかできなかった。

……すると、帰ろうとする阿柰狗羅ノ神を萩は真剣な面持ちで引き止めた。

「阿柰狗羅ノ神」

「？ どうした、緋ノ原家当主」

「先程のお言葉からして もしや、一部始終を御覧になられていたのでは？」

その言葉に萩 同様、阿柰狗羅ノ神も一変して真剣な表情となった。

「……ああ。見ていた」

「……では、翡翠に冥鬼が取り憑いていた事も、すべて知られていたのではありませんか ……？」

周りの空気が一気に重くなった。

「……翡翠にあの神が取り憑いていた事は、緋ノ原家当主達が来る二日前に知った」

「では何故、翡翠からあの冥鬼を引き離されなかったのですかっ！ そしたら、このような惨劇は起こらず、翡翠もあんな……っ」

言葉に力が入る。

阿柰狗羅ノ神は重々しい様子で

「俺が気配を感じた時にはもう…冥鬼とほぼ一つになっていた。心も身体も…あの状態で助けようと 一歩間違えれば、取り憑いていた冥鬼の力を増幅させる恐れがあったからだ。

力が増幅すれば、神である俺だろうと止めることが困難になる…。冥鬼だろうと元が神ならば尚更だ。

…だが、そんな時、緋ノ原家当主が来た。それで思ったんだ。緋ノ原家当主に一つ賭けてみよう。中の神を被えるかどうか。

その結果、神の俺でも出来ない事を緋ノ原家当主はやり遂げた。外部からではなく、内部から。

…まさか、口の中に札を含ませて、中の神だけを攻撃するとは思ってもみなかったからな」

「では、『賭け引きの戦いだった』と…そういう意味ですか？」

「ああ。だから今回の一件は俺の力不足でもあり、己の罪でもある。

だから、翡翠と共に罪滅ぼしをしようとな…。すまなかった。緋ノ原家当主」

「…いえ。僕もいきなり声を荒げてしまい、すみませんでした。今回の一件は冥鬼と戦ってみて、自分の力不足に確信をつきました。もっと、修業に励もうと…そう感じました。

阿柰狗羅ノ神。ご指示をしていただき、ありがとうございました」

萩は阿柰狗羅ノ神に一礼をした。

…その後、阿耨狗羅ノ神は翡翠を連れて、山へと戻っていった。

「…っ!」

蒼全は阿耨狗羅ノ神の言葉を思い出し、唇を噛み締めた。
自らの行いを悔いていたのだろう

その後、夜明けとともに萩たちは神隠しにあっていた子どもたちを連れ、村へと戻った。

そして…

「お帰りになられるのですか…」

一時は神隠しにあっていた亜紗葉だったが、今では動けるまでになつていた。

「はい。一晩お世話になりました」

「萩様。今回の件は本当にありがとうございます。私を含め、村の子どもたちを助けていただき」

話を数時間前に遡ると

萩たちは意識を失った亜紗葉と村の子どもたちを旅館に運んできていたところを、帰りを待っていた律に各部屋に子どもたちを運ぶの手伝ってもらった。

そして、亜紗葉の横たわる隣で律に事の事情を説明した。

「まさかそんな事があつたなんて…。では、もし、次に神隠し

にあつとしたら…」

「律さんだったかもしれませんが」

「！」

律は言葉が出なかった。

…そして今にいたる。

「その…、蒼全さんのお姿が見られなかったようですが…」

亜紗葉が心配そうに尋ねてきた。

「蒼全なら大丈夫です。村の入り口で、東雲と一緒にいますので」

「…そうですね」

「はい。あと、神隠しにあつた子どもたちに『物ノ怪から名前を聞かれても、決して答えてはいけない』と、そう伝えていたもらえますか？」

「名前を ですか…？ はい。わかりました」
「 それでは」

萩は亜紗葉たちに一礼をして、その場を立ち去ろうとした時

「萩さん」

律が萩を呼び止めた。

萩は律の方を振り返る。

「その…、本当にありがとうございました！」

萩は微笑み、頭を下げて、村の入り口へと歩いていった。

そして、亜紗葉たちの姿が見えなくなった後、走っていった。

入り口では、東雲が意識のない蒼全を木に寄り掛からせていた。途中、傷の痛みでまた意識を失っていたのだ。

「急いっつ」

萩と東雲は蒼全を抱え、その場から姿を消した。

…日の光を浴びながら

「ん…」

蒼全は目を覚ました。最初に見た光景が部屋の天井と…

「蒼^{ソウ}…」

心配した様子の萩。

「ここは…」

「家だよ。途中、蒼全はまた意識を失ったんだ」

「俺はまた倒れたのか」

「…大丈夫？ 蒼」

萩が今にも泣きだしそうな顔をしていた。
その顔を見て、蒼全は口角を上げ

「久しぶりだな。その呼び名で呼ぶのは」

「たまにだけどね」

萩の表情が曇ったままだった。

「そんな顔するな、萩。おまえらしくないぞ」

「だって、蒼…」

「俺は大丈夫だ。ほら、見ての通り」

蒼全は包帯で巻かれた傷口をさすった。

「…よかった」

萩が胸を撫で下ろしたかのように息を吐いた。
すると、

「萩。東雲は…」

「東雲なら、二階の部屋で休んでるよ。途中、蒼全の治療が終わってここで寝ていたから僕が二階まで運んだんだ」

「そうか…。東雲には後で礼を言わなきゃな。傷の具合はどうだ？ 萩」

「東雲に手当てをしてもらって傷も塞がったしそれに、僕のはそこまで深くなかったみたい。大した事じゃないよ」

萩が優しく笑う。

「そうか。安心した」

蒼全も安心した様子でいた。

「…さ、蒼全。もう少し休んでないと」

と、その時

階段を慌ただしくも降りてくる足音が聞こえた。
その足音は萩たちのいる部屋へと近づいてき、襖の辺りで静かになった。

そして

「蒼全」

小声で蒼全の名を言いながら、東雲がゆっくりと襖を開けた。

「東雲。蒼全がさつき、目を覚ましたよ」

萩が中へ入ってくるよう、こちらに手招きをする。

東雲は中へと入り、蒼全の傍らへときた。

「蒼全、具合はどう？傷はまだ痛む？」

「いや、大丈夫だ。東雲のおかげで。ありがとう。世話をかけたな」

「何言ってるの、蒼全。世話をかけたんじゃないよ。…でも、本当によかったあ」

安心した様子。

「後でまた、包帯を変えるからね。萩くんのも」

「ありがとう。東雲」

「…そういうえば、私、ここで寝ちゃったと思ってただけど、起きたら自分の部屋で寝てたんだよねえ。」

私、いつ部屋に戻ったのかな？」

東雲がふと疑問に思ったようだ。
すると

「それなら僕が東雲を部屋へと運んだんだよ」

「えっ、萩くんが！…ど、どうやって運んだの？」
「どうやって…って、こんな風に」

萩はキョトンとした様子で運ぶ素振りをした。
それを見て、東雲は

（萩くん、こんな風に っ、それ、姫サマ抱っこだよ！
萩くんが私を 姫サマ抱っこ…）

東雲は頭の中で空想の世界に浸りながら、その事を思った。

「…東雲？」

萩が東雲の顔を覗き込みながら目の前で手を振ってみせた。

「萩に抱かれた事に酔ってるんだろっな」

蒼全が口元をニヤつかせる。

「…！！」

萩が少し頬を染める。

「ちよっ…蒼全！何言ってるの！！ 違ってる…」

東雲が顔を真っ赤にさせていると

「…そうかあ〜？」

「…そうだよ！…もっっ！…！！」

その様子に、萩と蒼全は二人揃って笑った。

一方、縁側では三人の様子を見つめるかの如く、止まっていた一匹の黒蝶が空へと飛び立っていった。

…そして、黒蝶は萩の家から遠く離れたある場所へと辿り着き、そこにいた青年のもとへと舞っていき、手の甲に止まった。

その後、青年はなにか情報を得たのか、怪しげな笑みを浮かべた…

く消えゆく子供 現代の神隠しく 二刻 【完】

三刻に続く。

く過去の記憶 血に染まりし彼岸花く 三刻（前書き）

萩は朝から黒い衣に身を纏い、出かける準備をして、向かった先は
緋ノ原家先祖の眠る墓だった…
そして、其処で明かされる
萩の過去とは…

く過去の記憶 血に染まりし彼岸花く 三刻

季節も秋へと近づき紅葉が色をつけ始めた長月のある日の事…

萩は朝から出かける準備をしていた。

いつもの衣の上から、頭をも覆う巻布状の黒い衣を全身に身に纏っていた。

「萩くん！ 忘れ物はない？ 仏花は持った？」

東雲が玄関で忙しそうに声をかける。

…ガラ

「大丈夫だよ、東雲。ちゃんと持ったから。じゃあ、行ってきます」

「行ってらっしゃい」

東雲は切なさを背負った萩の後ろ姿を悲しそうに見つめていた。

すると

「萩は行ったか」

蒼全が玄関先から出てきた。

「蒼全！起きてきたんだ」

前回の天狗の件での傷も治り、今では以前と同じように生活していた。

「ああ。今日は俺たちにとっても…萩にとっても忘れてはいけない日だからな…。」
「そう長くは寝てられない」

「…そうだね」

「俺たちは後で行こう。今日ぐらいは、萩も一人がいいだろう。久しぶりの家族との時間だ」

「うん」

そう言うと、二人は家の中へと入っていった。

ザッ　　ザッ　　ザッ…

萩はある墓の前に行き、しばらくの間、その場で立ち尽くしていた。少し経って、酌んできた水を墓の上からかけ、仏花を添え、食べ物を供えた。

「　父上…母上…：…兄上　」

萩は悲しみを秘めた眼差しでその場に座り、手を合わせる。

「　あの日の事は本当に…本当にすみませんでした…。当主とあるう者が、気配一つ気付かず…。」

…しかし、一つ気になる事があります。

父上のような方が冥魂を奪われるとは…あの晩、なにがあったのですか？

誰に謝られていたのですか？　誰にご自分の名を明かされたのですか？

冥鬼では　なかつたのですか…？

疑問に思う事がいくつもあります。

そしてなぜ、自分だけ生き残ったのでしょうか…」

衣の上に一、二滴のにじみができた。

萩は涙を流していた。

その瞬間、萩の脳裏に昔の記憶が甦ってきた。

時を遡る事、五年前…

当時、弟の萩、サガミ 齢 十。

兄の相模、サガミ 齢 十二。

ザッ ザッ ザッ ザッ…

シュッ…シュッ…

…駆けてくる音と竹刀を振る音。

ザッ　　ザッ　　ザッ

シュッ　　シュ、　　シュッ…！

ザッ　　ザッ…！

「兄上…！」

元気のよい声で裏庭に来たのは弟の萩。

「ああ！萩。おかえり」

優しく弟に声をかけ、微笑む兄の相模。

「ただいまっ！ 兄上！！」

萩は相模に抱きついていった。それを優しく相模は両手で抱きしめた。

「ははっ、萩はいつも元気だな」

「ふふっ」

その様子を父、キヨヒロ 嚙宏は二人の様子を微笑ましく縁側に座って眺めていた。

緋ノ原 キヨヒロ 嚙宏は灰色の長髪を高い位置で一つに結っており、紫色の瞳を持つ。

萩、相模の父であり、現 当主である。

式神師は代々、当主が長髪で髪の長さは昔から力の強いものの象徴として信じられてきており、

一族で髪の長かったのは当主、あるいはその妻と次期当主という運命をたずさえられた子どもだけだった。

…そして、次期当主が現当主となった時、元 当主は『副当主』と、一つ位が下がり、髪を短く切るといふ風習がある。

緋ノ原家では、次期当主は白銀ハクギンの長髪に紫色の瞳をもつ少年。

相模と決まっております、萩は次期当主ではなかったので、髪が短かった。

「おかえり。萩」

嚙宏は息子に声をかける。

「ただいま！父上」

萩は嚙宏にも抱きついていった。

「おお！萩。いつも以上にたくましいな。今日はどうだった？学
び屋のほうは」

「うん！今日はね、算術を習ってきたんだ」

「ほう、算術とな。どうだ、難しかったか？」

「うん。でも、楽しかったんだ」

「そうかそうか。なら、よかった」

「うんっ」

萩が嚙宏と話していると

「萩、おかえりなさい」

優しい声がし、萩が顔を見上げると奥の部屋から母、ヤスナ 弥菜が出てき
た。

緋ノ原 ヤスナ 弥菜は紫まじりの紺色の長髪を下の方で一つに結び、紫色
の瞳を持つ。

萩、相模の母であり、嚙宏の妻だ。

「母上！」

萩は勢い良く、弥菜に抱きついた。

「あらあら。萩ったら」

すると、弥奈はふと顔を上げ

「さあさ、皆。少し休みましょうか？」

「うん」

「そうだな」

「はい。母上」

四人は縁側で並んで、団子を食べていた。

「そういえば、父上と兄上はここでなにをしていたの？」

「ん？ ああ、あれは竹刀で太刀の稽古をしていたんだよ」

「太刀の稽古？」

「そうだよ」

「そういえば、萩はあまり知らなかったな。」

いつもは萩が学び屋に行っている間に稽古をしていたんだ」

「そうだったんだあ〜」

「相模は剣術の才があるからなあ。父親に似て」

剛宏は相模の頭を撫でた。

相模は嬉しそうに満面の笑みを浮かべる。

「じゃあ、父上は剣術の方が得意なの？」

「ああ。どちらかと言うと剣術の方が得意だな」

「ん〜 そうなんだあ…。でも、凄いな。さすが兄上」

萩は尊敬の眼差しを相模に向ける。

「だが、萩。おまえには相模に負けにくいぐらいの『槍』という才がある。
それはおまえにとって誇らしい事だ」

「『剣術の才』に『槍の才』…。二人とも、さすがだわ」

剛宏と弥奈は二人を見ながら言った。

その二人の言葉に萩と相模は互いに照れ合いながらも微笑んだ。

「父上のご指導のおかげです。」

これから、もっともっと強くなって、父上のような立派な式神師になります」

「おお！それは頼もしい。今後の成長が楽しみだな」

「僕も兄上のように強くなる！」

「萩の目標は相模かあ」

「うん！」

「では、もっともつと鍛えないとな」

「あなた。ほどほどになさってくださいね」

「ああ。わかってる」

その家族団らんの様子を、剛宏の式神『瑪瑙』と『柊』が微笑ましそくに眺めていた。

…次の日

「ただいま」

萩が学び屋から帰ってきた。

「お帰り。萩」

「ただいま、兄上」

相模は居間にいた。

「あれ？父上と母上は」

「父上は先程、仕事に。母上はご自分の部屋に居られるみたい」

「そうなんだ。父上は式神師としての仕事に行っただね。」

…兄上はここでなにしてるの？

「さつきまで稽古をしていたから、少し休んでただ」

「わくさずが兄上。僕も後で槍の稽古でもしようかな？」

「…じゃあ、父上が帰ってきてから 萩。一つ、手合せといこうか？」

「！！ 兄上とダメだよ。僕なんかじゃ相手にならないよ」

「そうかな？やってみないとわからないよ。…それに、一度はしてみたかったんだよね。」

以前、稽古の様子を見ていた時、萩の素早さには驚きだったから

「兄上。…お世辞はいいですよ？」

「お世辞なんかじゃないよ。ただ、思ったまでを言っただけさ」

「兄上？」
「ん？なんだい？」

二人が話していると

「弥奈様、私も一緒に参ります」
「大丈夫ですよ。瑪瑙。少しばかり、買い物に行くだけですから」
「しかし、お一人では危のうございます」
「心配しなくとも大丈夫ですよ。瑪瑙は心配性なのだから。
私は冥魂も持つていないので襲われることもなく、もし持つていたとしても簡単には名を明かしませんよ」

嚙宏の式神、瑪瑙と母、弥奈が話をしていた。

黒髪の長髪に碧色の瞳を持つ女性。

名を瑪瑙メノウと言う。

父、嚙宏と契約をした式神だ。

「母上、どうしたの？」

萩が話しかけてきた。

「あら。萩に相模。ここにいたのね。」

今から少し通りに行くこうと思っていたのだけれど 瑪瑙が心配性で

…」

「では、自分が母上と一緒に参ります」

相模が話に入ってきた。

「僕も！」

萩も元気に続けて言う。

「では、相模も萩も私についてきてくれると言ってくれているので、大丈夫ですよ。瑪瑙。一人ではありません」

弥奈が微笑んで言った。

「そう、仰られるのでしたらわかりました」

そのように言うと、弥奈たち一行を門へと見送っていった。

「では、いつてらっしゃいませ」

「いつてきます」

弥奈たち一行は通りへと歩いていった。

「本当に瑪瑙には心配をかけたばなしですね」

「母上には冥鬼を見る事が出来るゆえに、心配なのですよ」

相模は母の身を安じながら言った。

「…本当、なぜなのでしょうねえー。…あら」

弥奈は、式神師でも、冥魂を持っているわけでもないが、冥鬼の姿を見ることが出来る。

なぜ見えるかについては父、嚙宏にも理由がわからないという。

本人は小さい頃から見えていたらしい。そのわけか、皆、なにかと心配のようだ。

弥奈は通りの端の草の場所で小さな人影を二つ見つけた。

「あっ！冥鬼だ！」

菟も同じく、その姿をとらえ、小さな声で言う。

弥奈は人差し指を口元にそっと持っていき、しーっと。

「あまり驚かせてはいけないわ」

「母上、この冥鬼は」

「悪い冥鬼ではなさそうですね。母上」

弥奈は買い物用の巾着から小さな菓子を取り出し、冥鬼の傍に静かに置いた。

「母上…？」

萩が不思議そうに尋ねた。

「さあ二人とも。行きましょうか」

「ああ！母上！」

萩はパタパタと母の後を追っていった。

「母上。どうしてあのような…」

相模が不思議と聞いてきた。

「あのような冥鬼たちは人間に姿を見られる事にあまり慣れていないようなの。」

たがら、そういう時は菓子を与えて、警戒心を和らげてあげて、何も言わずにその場を離れてあげると後でその菓子を嬉しそうに食べるの」

「母上はいつも、外で会う冥鬼に同じような事をされているのですか？」

「ええ。また、その姿がとても可愛らしくて。」

冥鬼でも、何事もなく普通に暮らしていくのが一番の幸せだと思っ
「の」

萩は相模と母の話聞きながら、そつと後ろを振り返った。

すると、先程の冥鬼たちが嬉しそうに小さな体で菓子を抱えていた。

…のちに、その冥鬼たちは『雛芥子^{ヒナゲシ}』、『雛菊^{ヒナギク}』と名付けられた。

買い物も終わり、日が西へと傾くなか、三人は彼岸花の咲く道を歩いていた。

弥奈は優しい眼差しで彼岸花を見つめていた。すると…

「萩、相模。二人は彼岸花は好きかしら？」

「彼岸花？ 僕は苦手だなあ。『死人花』とも言われたりするから。」

…そついえば屋敷内の門の所に咲いていたような…」

「自分も萩と同じ意見です」

萩と相模は答えた。

「では、なぜ 『彼岸花の下には死体が眠っている』 や 『死人花』とも言われるか、二人にはわかる？」

「えっ！…わからない」

萩が答える。

すると、弥奈が優しく語り始めた。

「彼岸花の根には毒があつて、モグラなどのモノが墓地の辺りを荒らさないように、近づけさせないようにするために彼岸花が植え

られたの。だから、花の周りには死人が埋まっているとも言われ
りしたんだと思うわ。

でも、私は皆からそんな風に言われようとも大事な役割のために
植えられている、咲いている彼岸花が好き」

「では、屋敷に咲いている彼岸花は母上が植えられたのでは
…？」

弥奈は相模に優しく微笑み

「ええ」

「そうだったんだ…」

萩と相模は互いに納得し合い、彼岸花を優しく見つめる母の横顔を
見つめていた。

萩は急に嬉しくなった。なせなら、母の好きな花を知ることが出来
たからだ。

（今度、母上に彼岸花を渡そう）

萩は思った。

それから、三人が屋敷へと戻ると父、嚙宏たちが帰ってきていた。まだ、式陣衣を着たままのようなので、どうやら、少し前に帰ってきたようだ。

「あつ、お帰りなさい。父上」

萩か父のもとへ駆けよつた。

「ああ、ただいま。皆も今、帰つたようだな」

「ええ」

「おかえりなさい。父上」

相模も父のもとへ駆けよる。

…皆、これからもこの平和な暮らしがいつまでも続くと思っていた。しかし、時を刻むことに運命の糸は徐々に、絡まり始めていたのか
もしれない…

く過去の記憶 血に染まりし彼岸花く 三刻*

…三年後。

萩は齡、十三。

相模は二カ月後に『当主の儀』を迎えようとしていた。

『当主の儀』は満 十五になる日に行われるようになっているので
現に齡、十四。

今では二人、少々幼き影も残しつつも、立派な顔立ちになっていた。

ある日

「二ヶ月後には兄上も当主の儀を受け、新たな当主の座に座られるのか…」

屋敷の廊下をゆっくりと歩きながら思っていた。

萩は誰よりも、心の底から相模が当主になる事を祝っていた。

屋敷内では、緋ノ原家に仕える者たちが、二ヶ月後に迫った大行事

の準備に早くも取り掛かっている様子で少しばかり騒々しい日が続く。
すると

「萩」

萩は呼び止められ、振り返った。
向こうから、母・弥奈がやってきた。

「どうされたのですか？母上」

萩が尋ねた。

「萩、少し買い物に行ってもらえないかしら？
相模に頼もうと思ったのだけれど今、剛宏様とそろばんの稽古をしていて」

「はい。わかりました」

萩は躊躇う事もなく用事を引き受けた。

「よかったわ。ごめんなさいね。萩」

そういうと、母は急ぎ足でその場を去っていった。

萩はその様子を見ながら、母上も忙しいんだな…と思いつつ、買い物へと出かけていった。

渡された巾着には、お金と墨で書かれたメモが入っていた。

萩が一人、通りを歩いていると

「萩様！」

「萩様」

「？」

萩は足元に目をやると、そこには雛芥子と雛菊がいた。

「あ、雛菊に雛芥子！」

「萩様、どこ行くの？」

「どこ行くの？」

二人が尋ねてきた。

「頼まれ事でね。これから買い物に行くんだ」

「買い物？いいな！」

「いいな」

「じゃあ、一緒に来るかい？」

「いいの！？ やった、やったあ〜！」

萩は、雛芥子たちと共に買い物へと行った。

…少し歩くと、萩は頼まれていた物を買ったためにある店へと着いた。
萩が店の商品を眺めていると

「あれ？萩！」

「？」

萩は声をかけられ、後ろを振り返ると

「…ああ！」

…その頃、緋ノ原家屋敷にいる兄、相模は父とのそろばんの稽古を
終えたばかりだった。

「相模、今日はこの辺で終わろうか」

「はい。父上」

相模は一息つこうと、縁側へと来た。

秋風が吹く中、落ち葉が風に舞っていた。

相模は軽く咳をし、草履を履き、庭へと出ようとした瞬間

「！！」

相模は突然、立体を崩し

ドサッ…！

その場に倒れた。

…その時

ドサッ…

そろばんを教えていた部屋で休んでいた父、嚙宏は庭の方で物音を聞いた。

「 …? 」

剛宏が庭の方に目をやるとそこには、相模が倒れていた。

「 !? 」

剛宏はすぐさま、相模のもとへと駆け寄り、抱き起こしながら

「 相模!! どうした相模! 相模ッ!! 」

剛宏が声を荒げていると

「 …あなた? 」

母、弥奈が二人に茶を運んで来た。

「 …どうなされたの? あなた 」

弥奈が不可思議に剛宏に尋ねると

「 …相模が倒れた! 医者を早く!! 急げッ!! 」

「 !?!! 」

弥奈は驚き

「 はっ、 はい!! 」

すると

「俺が行ってくる」

そう言うと、父、剛宏の式神である柊が医者呼びに、スウツとその場から姿を消した。

「相模！相模！！」

剛宏が声をかけるなか、呼吸はあるが、意識がない様子だった。

続く（）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4425y/>

蒼眼の契約

2011年11月24日01時46分発行